
調査年報 18

平成 17 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査年報 18

平成 17 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



擦文文化期竪穴住居跡



西島松2遺跡 アイヌ文化期の墓 (P 262)



柏木川4遺跡 KP-166出土の土器



H-1 覆土土器出土状況



CP-8 遺物出土状況



H-3 覆土遺物出土状況



縄文時代後期後葉の竪穴住居跡 (H-7)



貝塚検出状況



調査状況

目 次

平成17年度の調査

1	調査の概要	1
2	調査遺跡	4
	キウス9遺跡	4
	チプニー2遺跡	13
	対雁2遺跡	14
	矢不來6遺跡・矢不來11遺跡	18
	矢不來7遺跡	22
	矢不來8遺跡	26
	館野4遺跡	28
	館野遺跡	32
	リヤムナイ3遺跡・上リヤムナイ遺跡	36
	大町2遺跡	40
	東陽1遺跡	44
	天寧1遺跡	47
	白滝遺跡群	52
	森川3遺跡・三次郎川右岸遺跡	54
	柏木川4遺跡	56
	西島松2遺跡・西島松3遺跡	60
3	現地研修会の記録	64
4	協力活動及び研修	65
5	平成17年度刊行予定報告書	68
6	組織・機構	69
7	職員	70

北海道史略年表

本州の時代区分	年代（西暦）	北海道の時代区分	平成17年度調査遺跡の主な時期
明治～平成	A. D. 1900	(近代、現代)	
江戸時代		近世 アイヌ文化期	西島松 2 大町 2 キウス 9 キウス 9
室町時代			
鎌倉時代		A. D. 1200	
平安時代	擦文文化期		
奈良時代	A. D. 800	オホーツク文化期	柏木川 4、キウス 9
	古墳時代	A. D. 400	続縄文時代
弥生時代		縄文時代	大町 2、対雁 2 西島松 2
晩期	B. C. 300		対雁 2、大町 2、キウス 9、天寧 1 西島松 2、矢不來 8
	B. C. 1000		矢不來 7、柏木川 4 天寧 1
後期	B. C. 2000		天寧 1、西島松 2、矢不來 8 館野 4
	B. C. 3000		リヤムナイ 3、柏木川 4、矢不來 6 西島松 2
中期	B. C. 4000		上リヤムナイ、キウス 9 西島松 2 東陽 1
	B. C. 7000		草創期
前期	B. C. 12000	旧石器時代	
	B. C. 20000		
	B. C. 30000		

平成17年度の調査

1 調査の概要

今年度は道内7市町に所在する16遺跡で発掘調査を実施した。このうち7遺跡は前年度などからの継続調査である。継続で整理作業を行ったのは5市町村の6遺跡である。

発掘調査を工事原因別に見ると、国土交通省北海道開発局の各開発建設部が実施する河川改修、あるいは国道の建設や改良に伴う調査が13遺跡、北海道（土木現業所）が行う河川改修に伴うものが3遺跡である。東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）の高速道路建設に関わるものは、茅部郡森町の2遺跡の整理作業である。

以下、調査の成果を時代、時期順に略述する。縄文時代の遺跡では複数の時代の遺物が出土することが多いが、ここでは顕著なものを重点的に述べる。なお、遺構などの（ ）数字は員数である。

旧石器時代 チブニー2遺跡から有舌尖頭器が3点出土している。

縄文時代 早期 東陽1遺跡ではテンネル式土器の時期の竪穴住居跡（2）、土坑（3）、黒曜石の剥片集中（1）などが検出されている。礫石錘（21）は短軸に打ち欠きが見られるものである。これらの遺構・遺物はすべて樽前d降下火山灰よりも下位のものである。

キウス9遺跡では、黒曜石製の石刃鎌が破片を含めて70点ほど出土している。竪穴住居跡（1）は、平面形は略円形で直径7mほどの大型のもので、東釧路Ⅲ式土器を伴っている。西島松2遺跡では中茶路式土器の時期の住居跡が検出されている。上リヤムナイ遺跡では、420点ほどの黒曜石剥片が容器に入れられた様子を想定できる状態で検出されている。

前期 西島松2遺跡の静内中野式土器の時期の捨て場からは、土器、石器等とともに漆製品も出土している。キウス9遺跡では竪穴住居跡（1）が検出されている。

前年度調査区に接して発掘を行ったりヤムナイ3遺跡では、砂丘堆積物の中から焼土（59）、集石（15）、剥片集中（63）、石器集中（1）、炭化物集中（1）などの遺構が検出されている。これらの遺構を含む遺物包含層（生活面）は数枚あり、すべて縄文尖底土器の春日町式土器の前後の時期である。尖底部分に黒曜石剥片を埋め込んだ土器もある。平底土器も少量出土している。剥片集中は、ここが剥片剥離・石器製作の場所であったことを示すもので、頁岩、玄武岩、黒曜石を素材とする多数の石核・剥片・破片がまとまりを持って検出されている。石器集中は、大型の石鎌、スクレイパー、石斧、赤鉄鉱の原石など400点ほどがまとまって出土したものである。このほか、海獣類とみられる獣骨片の検出やスクレイパー、たたき石の多さが特徴として挙げられる。

柏木川4遺跡では植苗式土器の時期の住居が検出されている。矢不來6遺跡では、円筒下層式土器の時期の竪穴住居跡（4）、土坑（2）、小ピット（12）、焼土（20）、埋設土器（1）などの遺構が検出されている。

中期 館野4遺跡では、竪穴住居跡（9）、土坑（78）、小ピット（94）、焼土（30）、石囲い炉（3）、埋設土器（3）などの遺構が検出されている。これらは円筒上層式土器の時期のものである。ここでは住居跡などの遺構とは別の区域にTピット（7）が検出されている。

西島松2遺跡では中期とみなされる竪穴住居跡（13）がある。矢不來8遺跡では竪穴住居跡（1）、土坑（9）、柱穴様の小土坑（13）が検出されている。これらの遺構は後半の時期であろう。

天寧1遺跡では貝塚が検出されている。標高4mほどのゆるい傾斜に5m×5mの範囲に広がっており、時期は北筒Ⅱ式土器～北筒Ⅴ式土器の頃のものである。厚さは中央部分で1m弱である。貝類はオオノガイ、アサリが目につく。この貝塚にはエゾシカなどの陸獣類、アシカ、オットセイなどの海獣類、

カジキマグロ、サケなどの魚類など多種多様の骨が認められる。さらに竪穴住居跡（1）、土坑（6）、集石（28）、剥片集中（3）、焼土（56）などの遺構も検出されている。石器では石槍、刃部が内湾するスクレイパー、加工痕・使用痕のある剥片などが多くみられる。

後期 矢不來8遺跡では後期初頭の時期の焼土（3）が検出されている。西島松2遺跡では、前葉の時期の竪穴住居跡（1）が検出されている。大町2遺跡では前半の時期とみなされる竪穴住居跡（2）が検出されている。矢不來11遺跡の焼土（5）は、前葉の時期のものである。柏木川4遺跡の低地部では、後葉の遺物が出土している。

矢不來7遺跡では竪穴住居跡（13）、土坑（3）、石組み炉（1）、焼土（4）、土器集中（14）、礫集中（3）などの遺構が検出されている。これらの諸遺構、および包含層から出土した土器から判断すると、ここは後期後葉の限定された時期の集落であったといえる。竪穴住居跡の6軒は、地表面観察において、くぼみが認められたものである。石器では砥石の比率が高いのが目に付く。H-7と呼称している住居跡の床面から石棒片が出土している。

晩期 天寧1遺跡では、晩期前半とみなされる土器が出土している。矢不來8遺跡では、土坑（1）、焼土（1）、埋設土器（2）、礫集中（1）などが検出されている。埋設土器は、ひとつは壺形、もうひとつは深鉢形である。西島松2遺跡では、後葉の時期の土坑墓・土坑、焼土などを多数検出している。これらの遺構は、次年度の調査予定区域へ続いている。

大町2遺跡では、墓の可能性が高い土坑群が検出されている。柏木川4遺跡では、多数の土坑が検出されている。チブニー2遺跡ではタンネトウL式土器の時期の土坑（2）、焼土（1）などが検出されている。キウス9遺跡の焼土の多くは、タンネトウL式土器の時期のものである。大町2遺跡ではタンネトウL式土器の時期の土坑群が検出されている。

対雁2遺跡で検出された土坑（32）、焼土（270）、集石（7）などは、晩期後半～続縄文後葉の時期である。今年度検出された土坑は、円形や楕円形、規模は長径0.4～0.8mほどの小型のものが多い。自然埋没したとみなされるもののほかに、礫等が検出されていて墓坑と推定できるものがある。また、土坑内で多量のクルミを焼いた土坑も検出された。石器は、石鎌、スクレイパー、たたき石が多く出土している。

平成17年度の発掘調査など

事業委託者	原因工事	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	区分、備考
札幌開発建設部	一般国道337号新千歳空港関連工事	チブニー2	千歳市	1,300	平成16年から継続
		キウス9	千歳市	17,044	新規
石狩川開発建設部	石狩川改修工事	対雁2	江別市	3,650	平成11年から継続
		対雁2	江別市	-	整理作業
函館開発建設部	高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事	矢不來6	上磯町	4,660	新規
		矢不來7	上磯町	6,482	平成16年から継続
		矢不來8	上磯町	6,196	新規
		矢不來11	上磯町	5,300	新規
		館野4	上磯町	7,100	新規
		館野	上磯町	-	整理作業
小樽開発建設部	一般国道276号岩内共和道路工事	リヤムナイ3	共和町	6,100	平成16年から継続
		上リヤムナイ	共和町	1,300	新規
室蘭開発建設部	一般国道234号早来バイパス建設工事	大町2	早来町	2,400	平成16年から継続
釧路開発建設部	一般国道44号釧路町釧路外環状道路工事	天寧1	釧路町	618	新規
		東陽1	釧路町	382	新規
網走開発建設部	一般国道450号白滝丸瀬布道路工事	服部台2ほか	遠軽町 (旧白滝村)	-	整理作業
東日本高速道路株式会社北海道支社	北海道縦貫自動車道建設工事	森川3	森町	-	整理作業
		三次郎川右岸	森町	-	整理作業
石狩支庁 (札幌土木現業所)	柏木川基幹河川改修工事	西島松2	恵庭市	7,205	新規
		西島松3	恵庭市	2,800	平成15年から継続
		柏木川4	恵庭市	14,140	平成16年から継続
		西島松5	恵庭市	-	整理作業
合		計		86,677	

続縄文時代 矢不來8遺跡では、恵山式土器を含む土器集中(1)が検出されている。大町2遺跡では、後北C₁式土器の時期とみなされる土坑、柱穴、集石、焼土、炭化物集中、土器・石器等の遺物集中などの遺構、遺物が検出されている。粘板岩の石核・剥片はこの時期に顕著な石鏃の製作に関わるものである。

擦文文化期 柏木川4遺跡の住居跡(2)はカリンバ型と呼ばれるもので、柱穴は堅穴の外側四隅に設定されている。ともに地表面観察において深くぼみが認められたもので、床面の状態は構築材の焼失を示している。キウス9遺跡では堅穴住居跡(6)、鍛冶遺構(1)が検出されている。遺物は甕、球胴甕、高坏、坏などの土器のほかには鉄製品、扁平円礫、紡錘車、土玉などがみられる。鍛冶遺構は8m×6mほどの範囲に、鉄製品、鉄片、鍛造剥片、鉄滓、鉄床石、ふいごの羽口片などが出土している。大町2遺跡では、擦文土器が少量出土している。

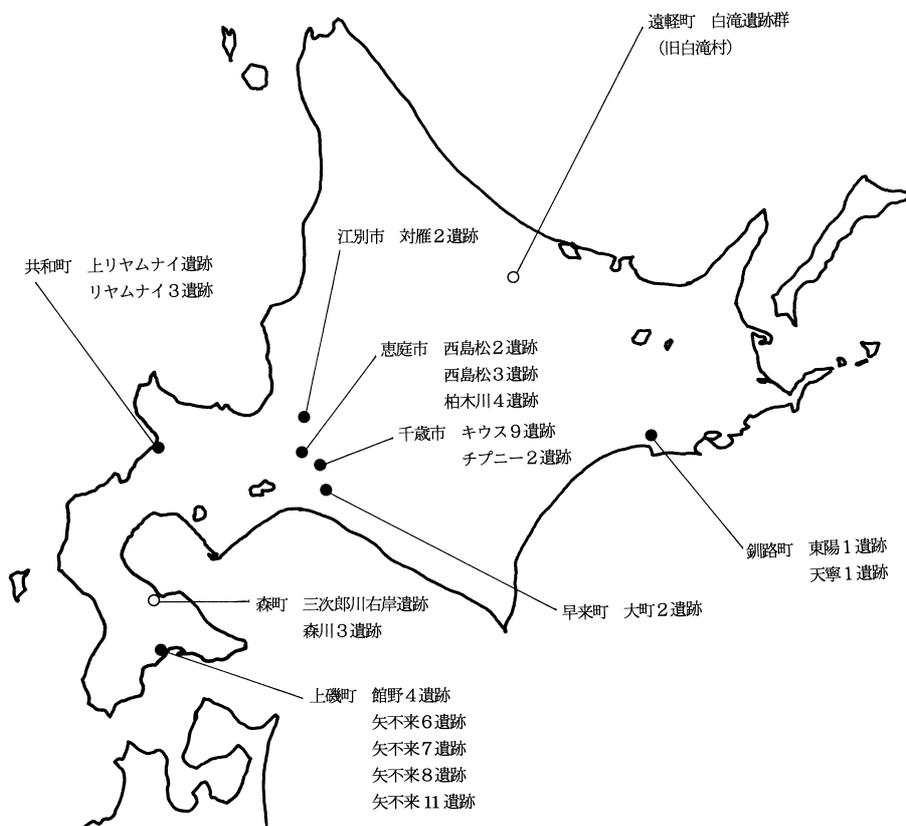
キウス9遺跡の平地住居跡(3)、建物跡(3)は擦文文化期～アイヌ文化期のものである。

アイヌ文化期 西島松2遺跡では、近世アイヌ墓が1基検出され、太刀、刀子、マレックなどの鉄製品が出土している。大町2遺跡では、ふいごの羽口、内耳鉄鍋、刀子が出土している。

継続整理・報告書作成 森川3遺跡、三次郎川右岸遺跡は前年度の発掘資料の整理作業である。白滝遺跡群、対雁2遺跡、西島松5遺跡、館野遺跡については、それぞれ膨大な資料群の整理が継続されている。

対雁2遺跡の整理作業は、平成11年、12年に調査を行った「土器集中1」である。土器片68,000点余の接合・復元作業を行い、石器等5,900点余のほか多量の炭化物、焼けた魚骨・獣骨片の精査を行っている。土器の大半は大洞A'式に並行するもので、一部は砂沢式に並行する可能性もある。

館野遺跡は平成15年度に調査したものの整理作業であり、43万点余の遺物を対象としており、土器の接合・復元などをすすめている。



2 調査遺跡

キウス9遺跡 (A-03-279)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央417、972

調査面積：17,044㎡

発掘期間：平成17年5月9日～10月31日

調査員：三浦正人、皆川洋一、菊池慈人、新家水奈、愛場和人、阿部明義、広田良成

遺跡の概要

遺跡は千歳市街地から北東に約8km、馬追丘陵西側裾部にある。調査区はキウス川左岸の標高18～27mの段丘および緩斜面上にあり、北側は急斜面下にキウス川が西流する。現況は林地であり、木根や風倒木痕が多数見られる。またTa-c降灰期～B-Tm降灰期の間の地割れが複数走っている。基本土層は下図の通りで、Ⅲ層およびⅤ～Ⅵ層が主な遺物包含層である。遺跡の特徴として、擦文文化期前期の集落が主体である点と石刃鏃が多数出土した点が挙げられる。

遺構と遺物

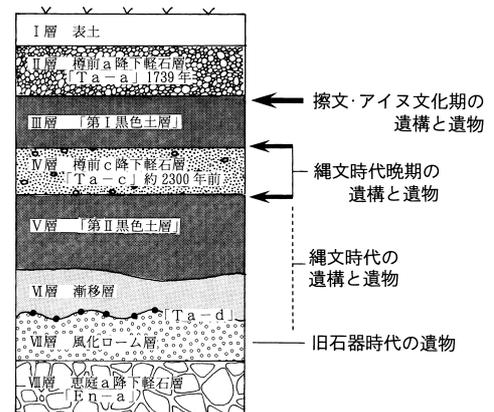
Ⅲ層の遺構は、平地住居跡3軒・建物跡3棟（擦文文化期～アイヌ文化期）、竪穴住居跡6軒・鍛冶遺構1か所（擦文文化期前期）、土坑4基、集石3か所、灰集中4か所、焼土15か所、柱穴群などがある。擦文文化期前期の竪穴住居跡は、段丘縁の平坦面に位置する。平面形は1軒のみ円形に近いが、それ以外は隅丸方形である。2軒は北側壁のほぼ中央にカマドを有する。住居跡の遺物は甕・球胴甕・高坏・坏などの土器のほか、紡錘車・土玉などの土製品、扁平円礫などの石器、鉄製品がある。鍛冶遺構は8×6mほどの範囲で、鉄製品（片）・鉄滓・鉄床石・ふいごの羽口片などが出土し、小規模な製鉄作業が行われたと想定できる遺構であるが、焼土や柱穴は確認されなかった。

Ⅴ～Ⅵ層の遺構は、竪穴住居跡2軒（縄文時代早期・前期）、土坑15基、Tピット4基、焼土27か所、フレイク集中などがある。また北側斜面部には、自然のものと考えられる焼土群がある。縄文時代早期の住居は、おおむね円形で直径約7mの大型のものであり、東釧路Ⅲ式土器を伴っている。

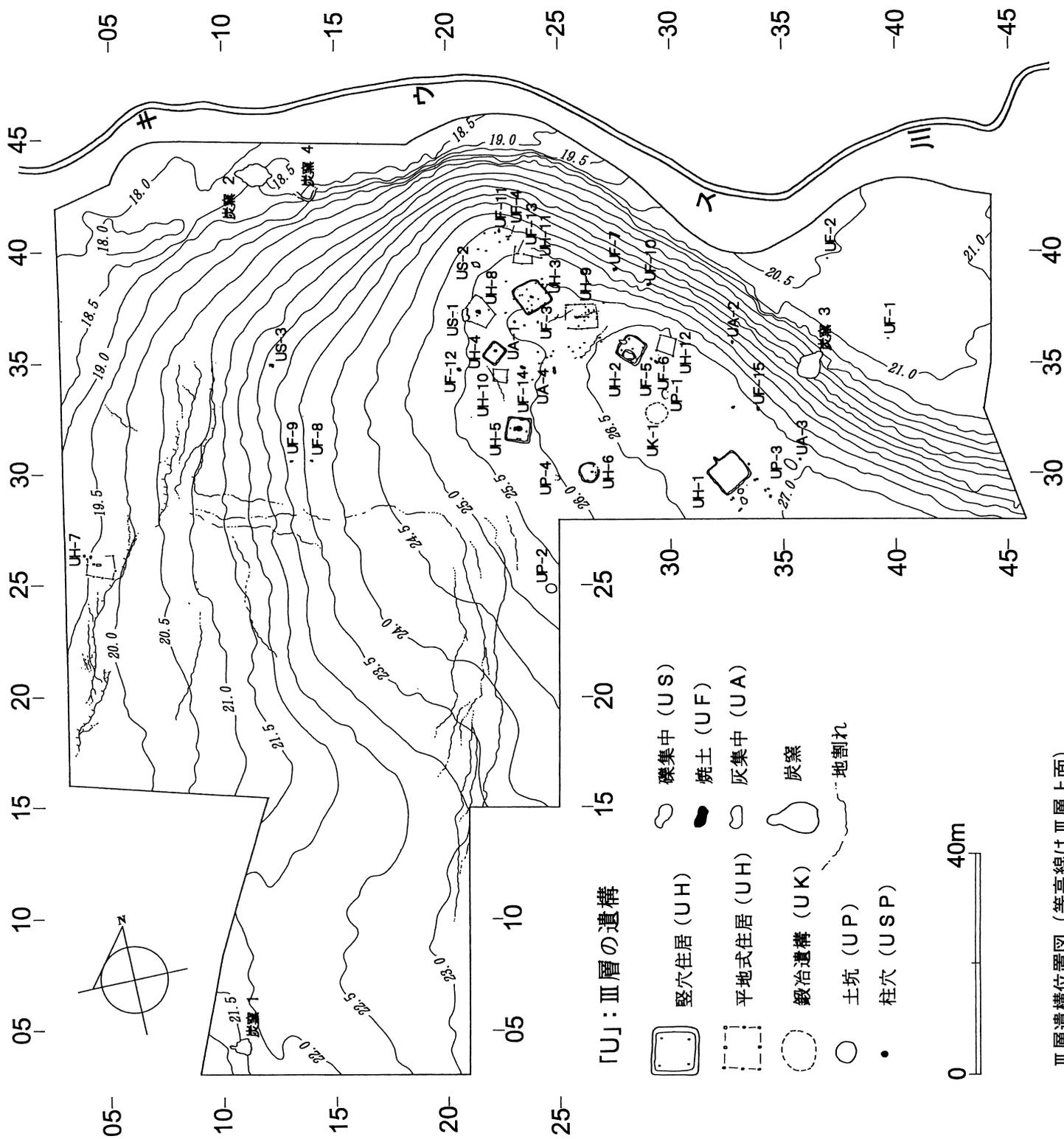
遺物は総数約83,000点出土した。内訳は土器等約45,300点、石器等36,800点、金属製品約990点（鉄滓など含む）で、土器は縄文時代早期～晩期・続縄文時代・擦文文化期まで各時期のものが出土しているが、擦文土器が約26,000点で最も多い。特徴的な遺物として、石刃鏃が70点ほど（破片含む）出土している。土器やその他の石器は伴わず、平坦面から緩斜面にかけての広い範囲に分布する。



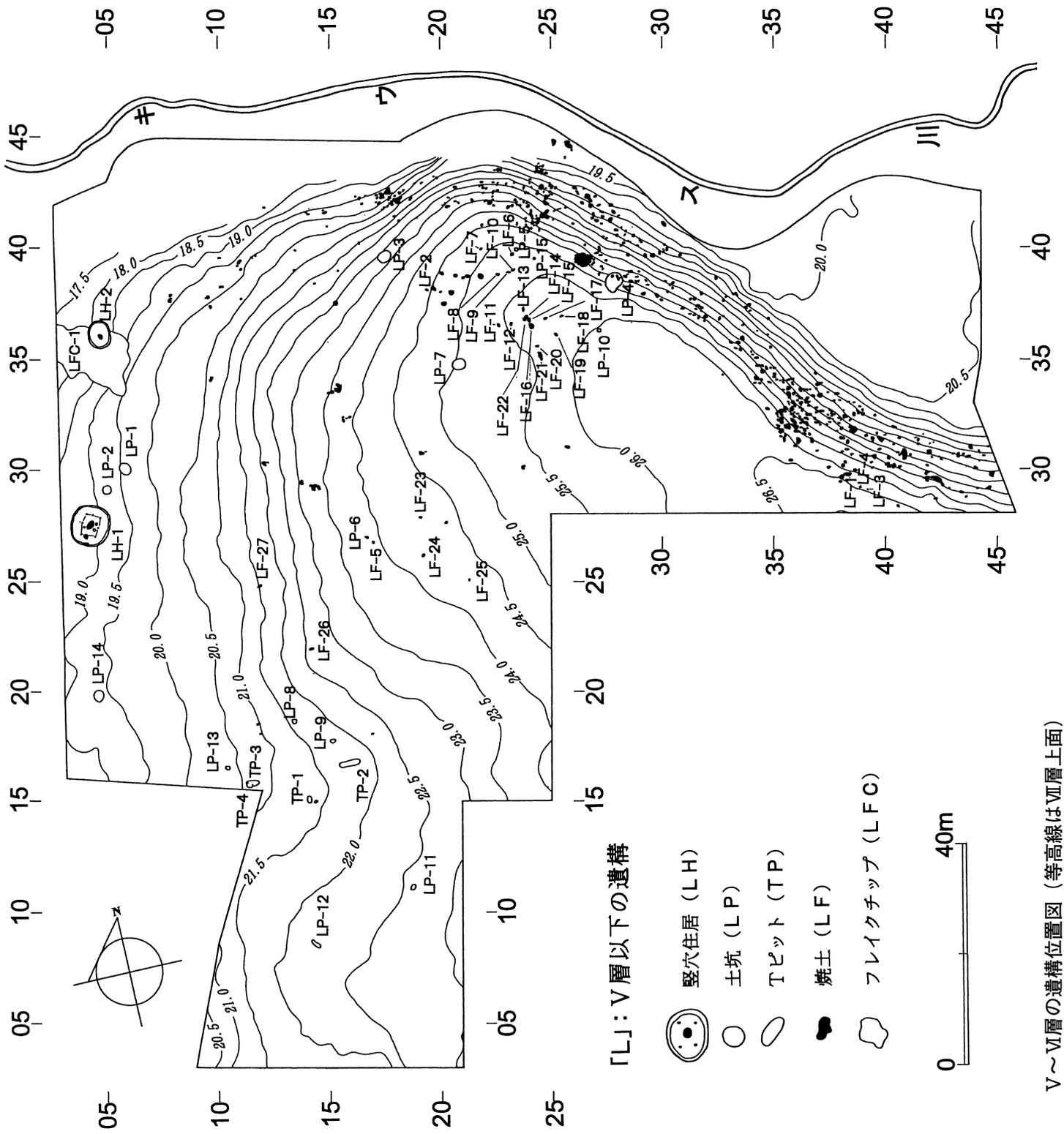
遺跡位置図



基本土層模式図



III層遺構位置図 (等高線はIII層上面)



V～VI層の遺構位置図 (等高線はVII層上面)



UH-1 炭化材出土状況



UH-1 カマド土層断面



UH-1 付属施設検出状況



UH-1 掘り上げ土土器出土状況

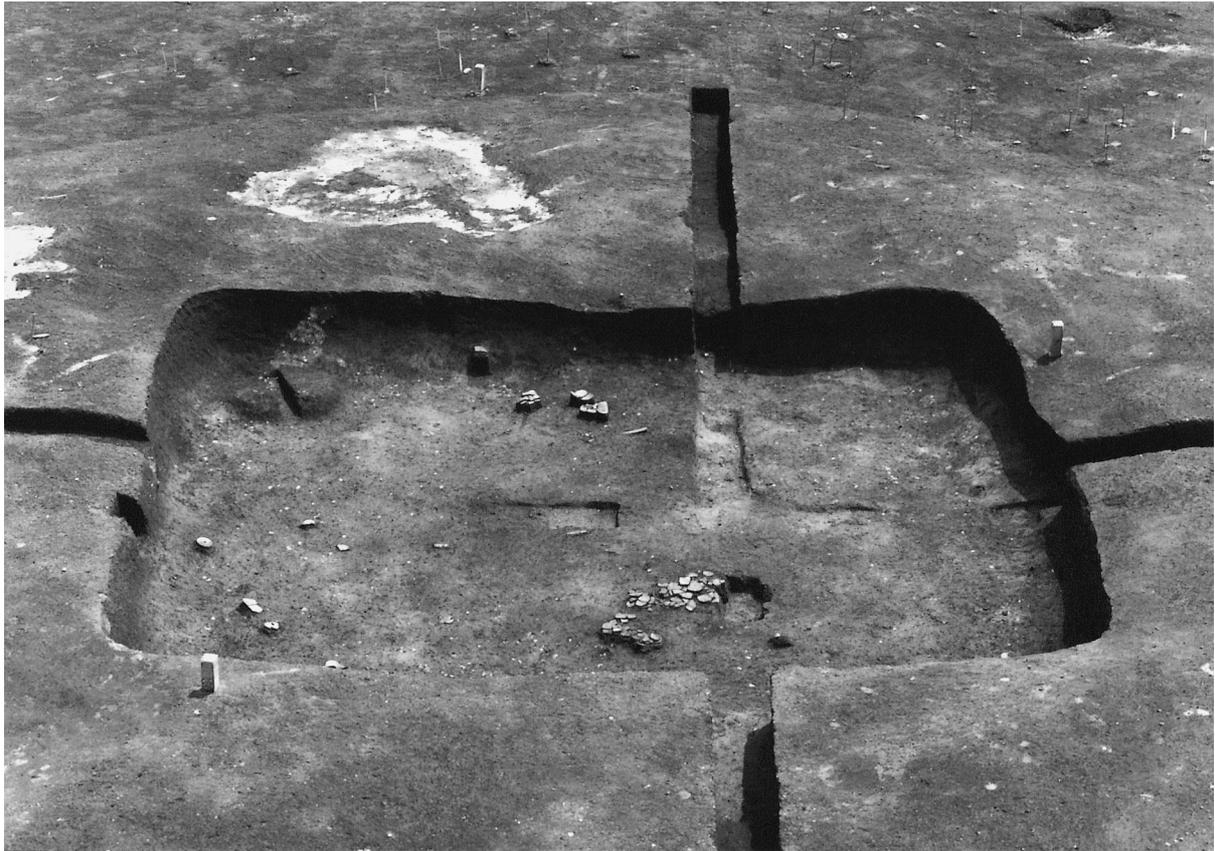
キウス9遺跡



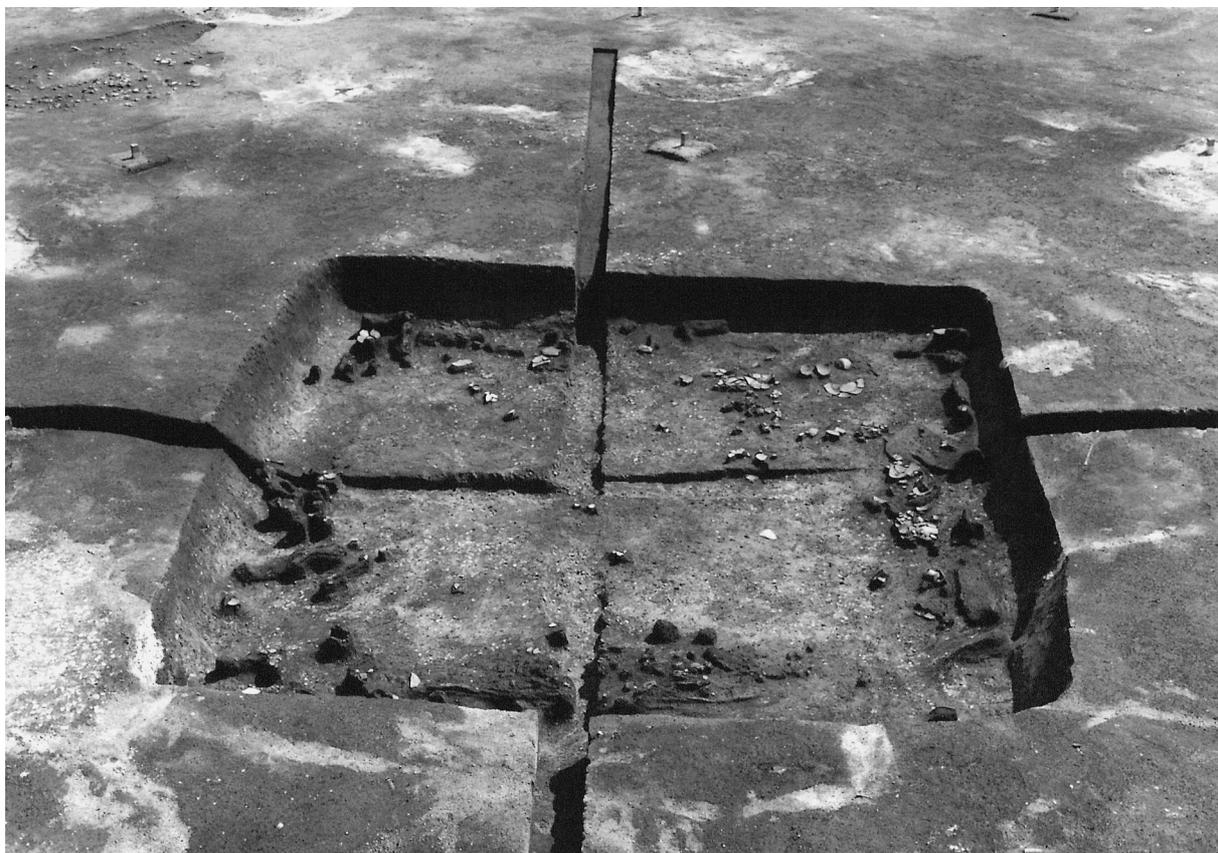
UH-2床面・掘り上げ土検出状況



UH-3床面検出状況

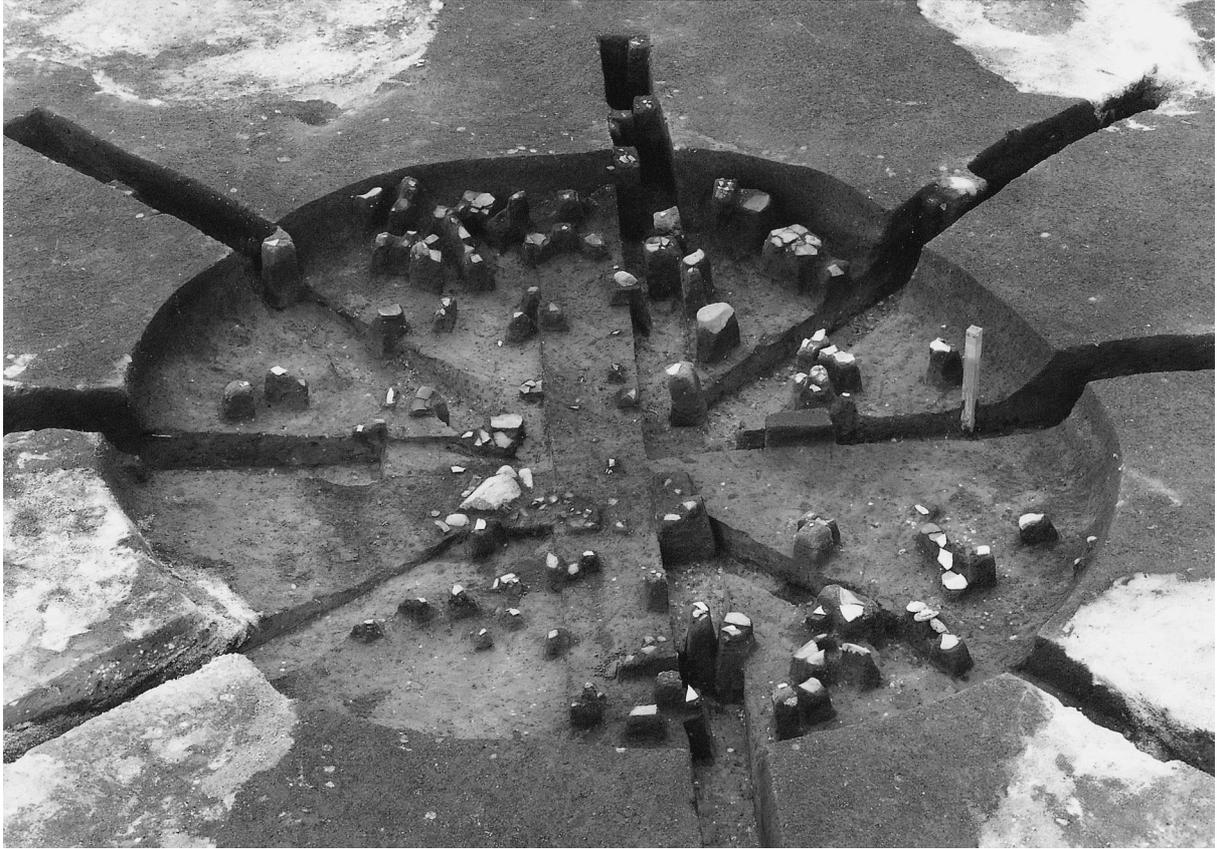


UH-4 床面遺物出土状況



UH-5 床面遺物出土状況

キウス9遺跡



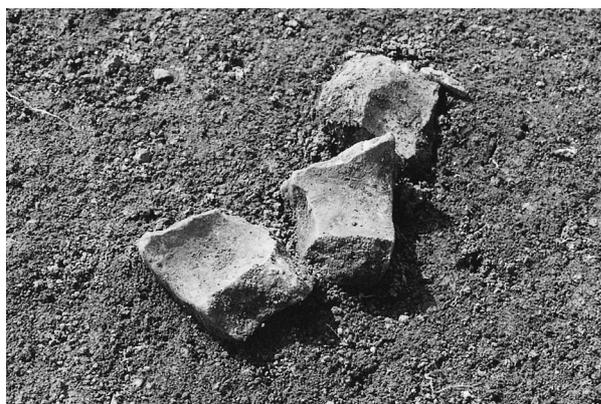
UH-6 遺物出土状況



UH-7 検出状況



UK-1 (鍛冶遺構) 調査状況



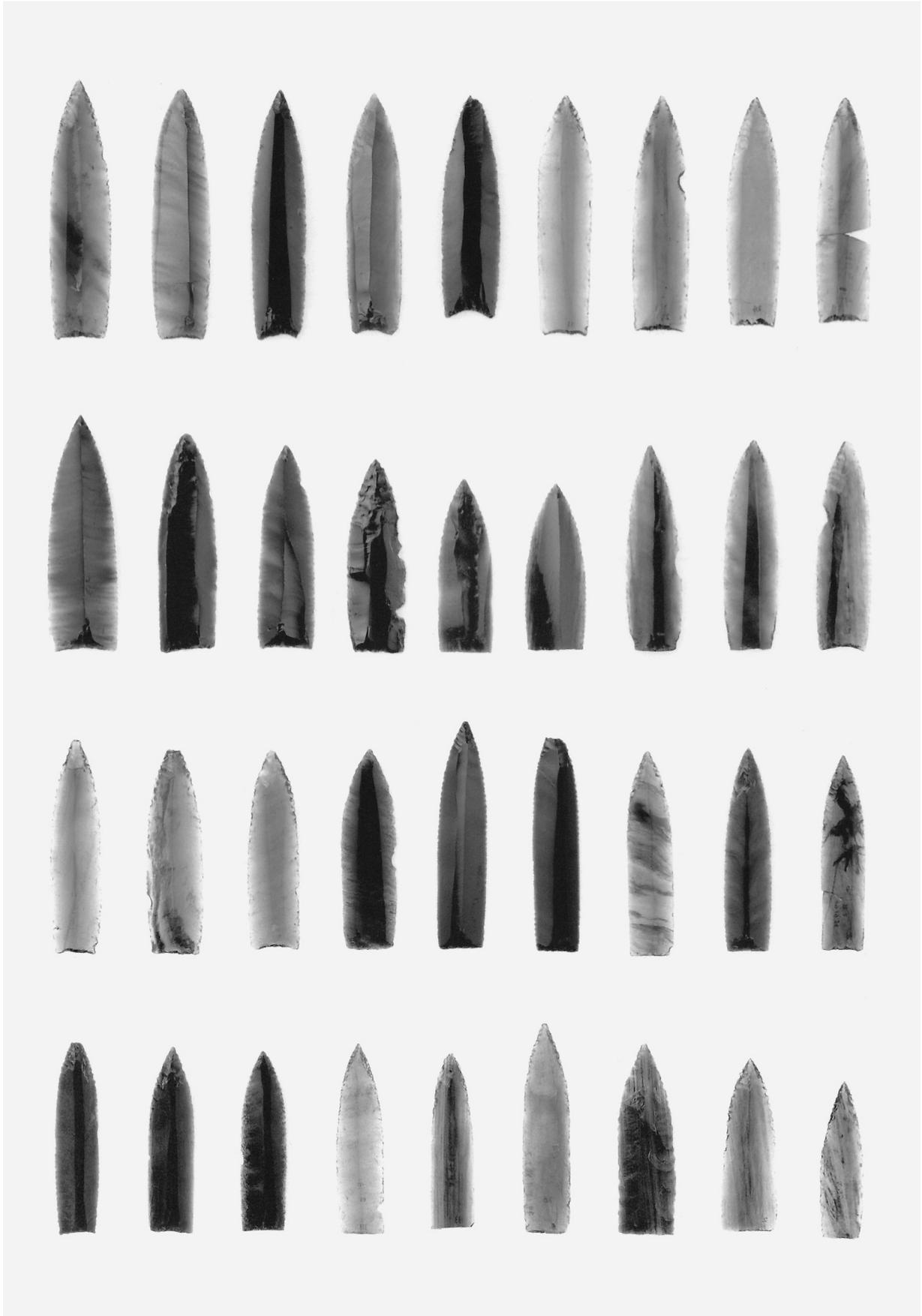
UK-1 ふいごの羽口出土状況



LH-2 遺物出土状況



LH-1 完掘



石刃鏃

チプニー 2 遺跡 (A-03-278)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央855-39

調査面積：1,300㎡

発掘期間：平成17年5月6日～10月31日

調査員：皆川洋一、菊池慈人

遺跡の概要

チプニー 2 遺跡は、馬追丘陵西側緩斜面に流れるチプニー川右岸の標高約20～22mの河岸段丘に立地する。既に平成13年度のチプニー 1 遺跡、平成13・14・16年度のチプニー 2 遺跡が調査され、16年度以外は報告済みである。本年度は、昨年度調査区内に残された追分町方面に向かう道路下の範囲1,300㎡の調査を実施した。

主な包含層はⅢ層（「第Ⅰ黒色土層」相当）とⅤ層（「第Ⅱ黒色土層」相当）である。

遺構と遺物

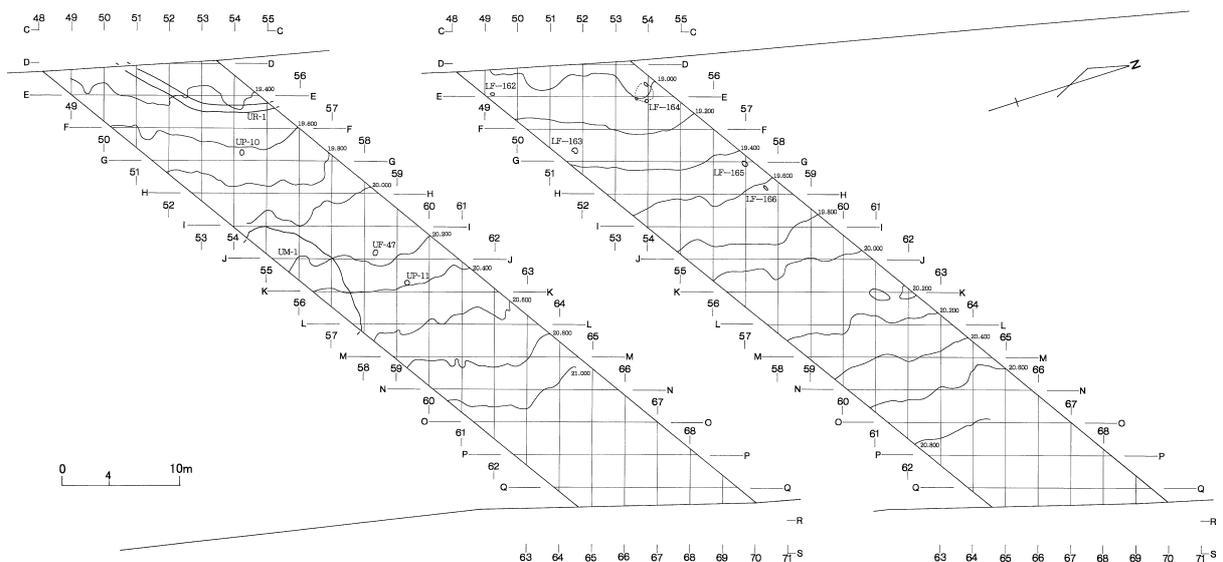
遺構は、Ⅲ層から土壌 2 基 (UP-10・11)、焼土 1 か所 (UF-47)、盛土状の遺構 (UM-1)、道跡 (UR-1) などが見つかっている。大半は縄文時代晩期のものと考えられる。Ⅴ・Ⅵ層からは焼土 5 か所 (LF-162～166) が見つかっている。

遺物は約1,000点が出土した。土器の主体はⅢ層から出土する縄文時代晩期末のタンネトウL式土器である。他には、縄文時代早・前・中期、続縄文、擦文の土器なども出土している。石器は有舌尖頭器、石槍、石鏃、つまみ付きナイフ、石斧、たたき石、すり石、砥石、などが出土している。

チプニー 2 遺跡は今回で全ての範囲の調査が終了となる。報告は平成17年度である。



有舌尖頭器出土状況



遺構位置図 (左：Ⅲ層、右：Ⅴ～Ⅵ層)

ついでに

対雁 2 遺跡 (A-02-110)

事業名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

所在地：江別市工栄町28番地 (石狩川河川敷緑地内)

調査面積：3,650㎡ (うち400㎡は継続調査)

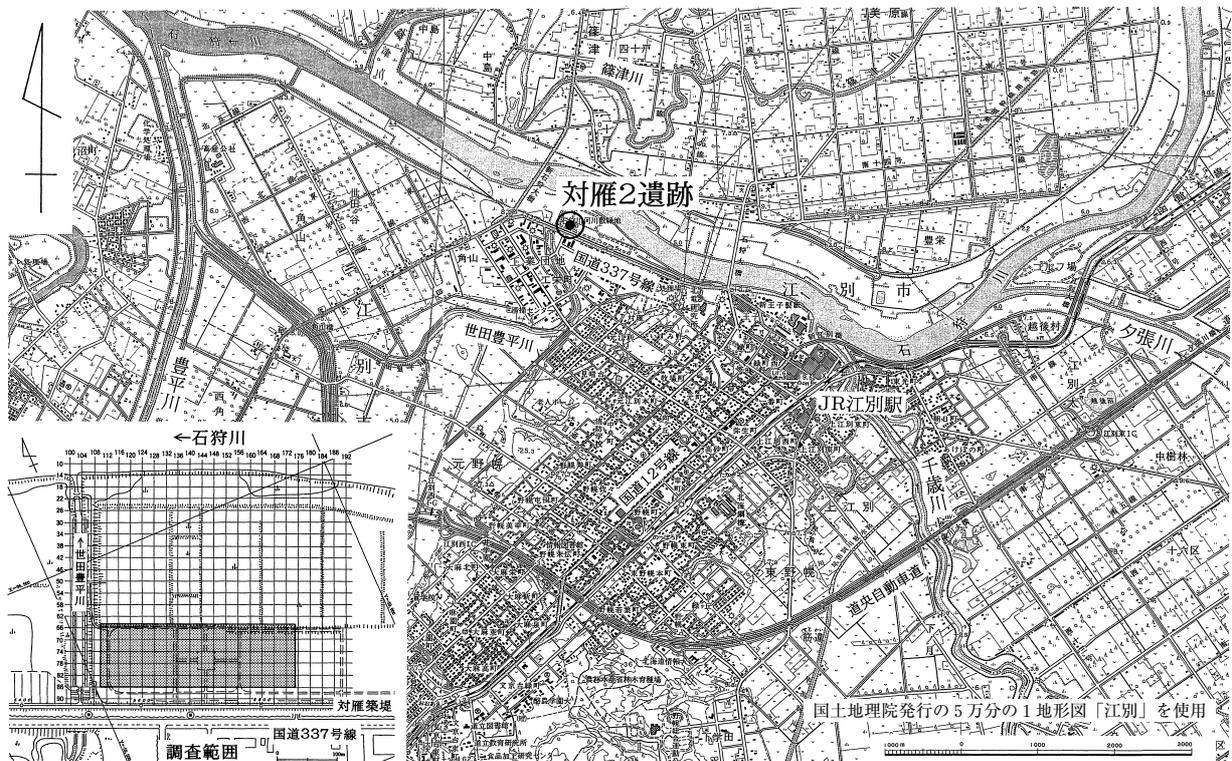
発掘期間：平成17年5月9日～10月31日

調査員：鈴木 信、芝田直人、酒井秀治

遺跡の概要

対雁 2 遺跡は JR 江別駅の北西約 4 km の石狩川左岸に位置する。世田豊平川 (旧豊平川) との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約 6～8 m の自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する 1970 年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

遺跡調査の 7 か年目にあたる。これまでの調査から、遺跡は縄文時代晩期後半～続縄文時代後葉にかけて形成されたと考えられる。今年度は、昨年度からの継続調査範囲を含めた 110～175 線間 325 m × 71～73 線間 10 m の 3,250 ㎡、および継続調査範囲の 149～157 線間 40 m × 73～75 線間 10 m の 400 ㎡、合計 3,650 ㎡ の調査を行った。遺跡の地層は自然堤防の形成に伴い、西側にある世田豊平川へ向かって落ち込んでいる。ほぼ同一時期の遺構・遺物が検出する生活面は、上層部の風成堆積と下層部の季節的・周期的な水位上昇と考えられる水成堆積により数 cm～十数 cm の土砂で覆われている。平成 13・14 年度調査範囲では 245 面、平成 15 年度調査範囲では 104 面の生活面が確認されている。同一の生活面は現地表面の標高 8.4 m 付近から標高 5.4 m 付近まで、標高差約 3 m にわたって検出されている。遺物や放射性炭素年代測定結果から、生活面はごく短いサイクルで形成されたと考えられる。



遺跡位置図

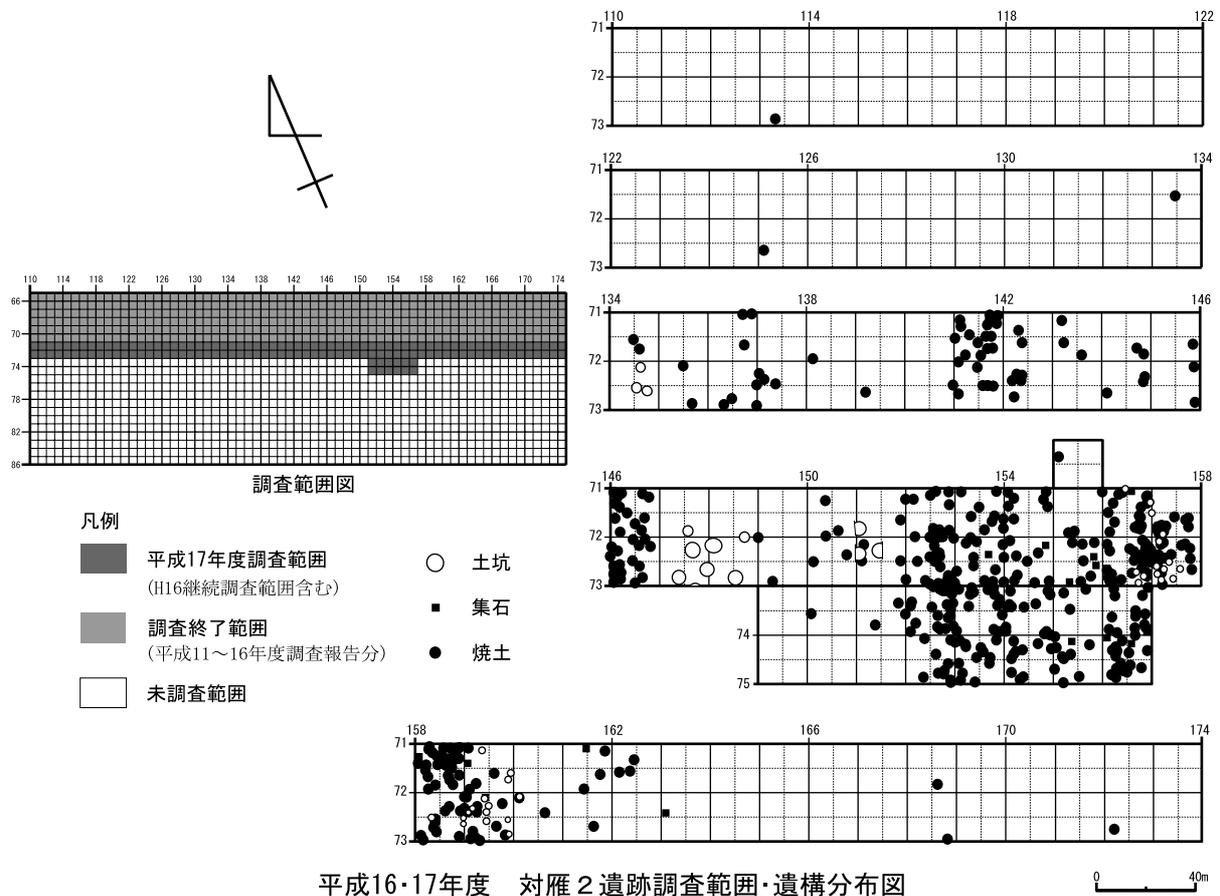
遺構と遺物

今年度の発掘調査では、土坑が32基、焼土は270か所、集石7か所のほかフレイクチップや炭化物の範囲が検出された。平成11・16年分を含めると土坑が46基、焼土449か所、集石12か所となる。今年度検出された土坑は円形や楕円形、規模は長径0.4～0.8mほどの小型のものが多い。自然埋没したと考えられるもののほかに、礫等が入る墓坑と見られるものが検出された。また、土坑内で多量のクルミを焼いたものが検出されている。焼土は現地で形成されてクルミなどの炭化物や骨片を伴うもの、焼土の周囲に土器を据えるためと考えられる浅い小ピットを伴うものなどのほかに、焼土や炭化物を廃棄したものが検出された。

今年度出土した遺物は土器等18,639点、石器等8,302点、合計26,941点である。平成11・16年分を含めると土器等24,283点、石器等29,180点、合計53,463点となる。遺物のほとんどは138線以東の発掘区から出土した。時期は縄文時代晩期後葉～続縄文時代前葉に属するものである。石器は石鏃・スクレイパー・たたき石が多く出土している。石材としては、剥片石器が黒曜石、礫石器では安山岩・砂岩・珪岩が多い。

土器集中1の整理作業

土器集中1は平成11・12年度に調査を行い、土器片68,075点、石器等5,954点のほか、多量の炭化物・焼獣骨片が出土している。出土した土器は縄文時代晩期後葉の後半、大洞A'式に並行する時期のもので、続縄文時代初頭の砂沢式に並行する可能性もある。整理作業は昨年に引き続き土器の破片接合・復元・実測（一部日立エンジニアリング株式会社に委託してのレーザー三次元計測、形状解析）・写真撮影等を行っている。平成18年度に報告書を刊行の予定である。



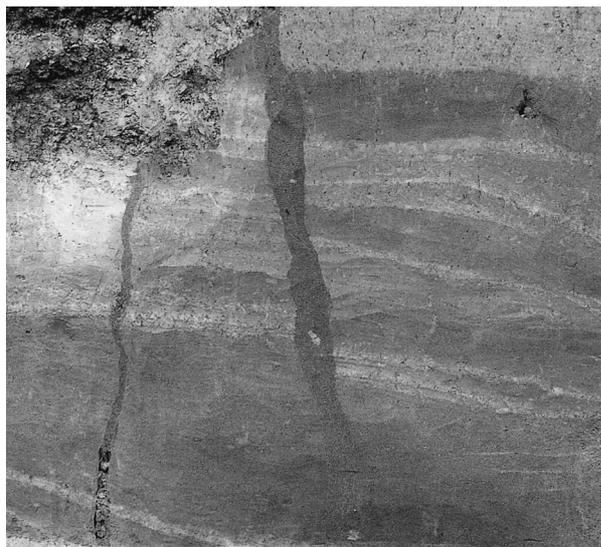
対雁 2 遺跡



調査状況



155～157線間土層断面



噴砂と断層



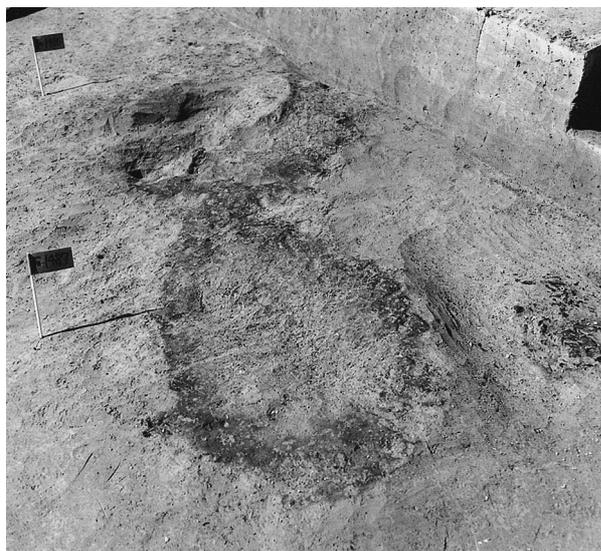
土坑完掘



P-179土層断面・炭化クルミ出土状況



P-194遺物出土状況



焼土検出状況



遺物出土状況

やふらい 矢不來 6 遺跡 (B-06-60)・やふらい 矢不來 11 遺跡 (B-06-77)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字矢不來260ほか(矢不來6)、字矢不來252ほか(矢不來11)

調査面積：4,660㎡(矢不來6)、5,300㎡(矢不來11)

発掘期間：平成17年5月12日～8月31日

調査員：工藤研治、鎌田 望、福井淳一、柳瀬由佳

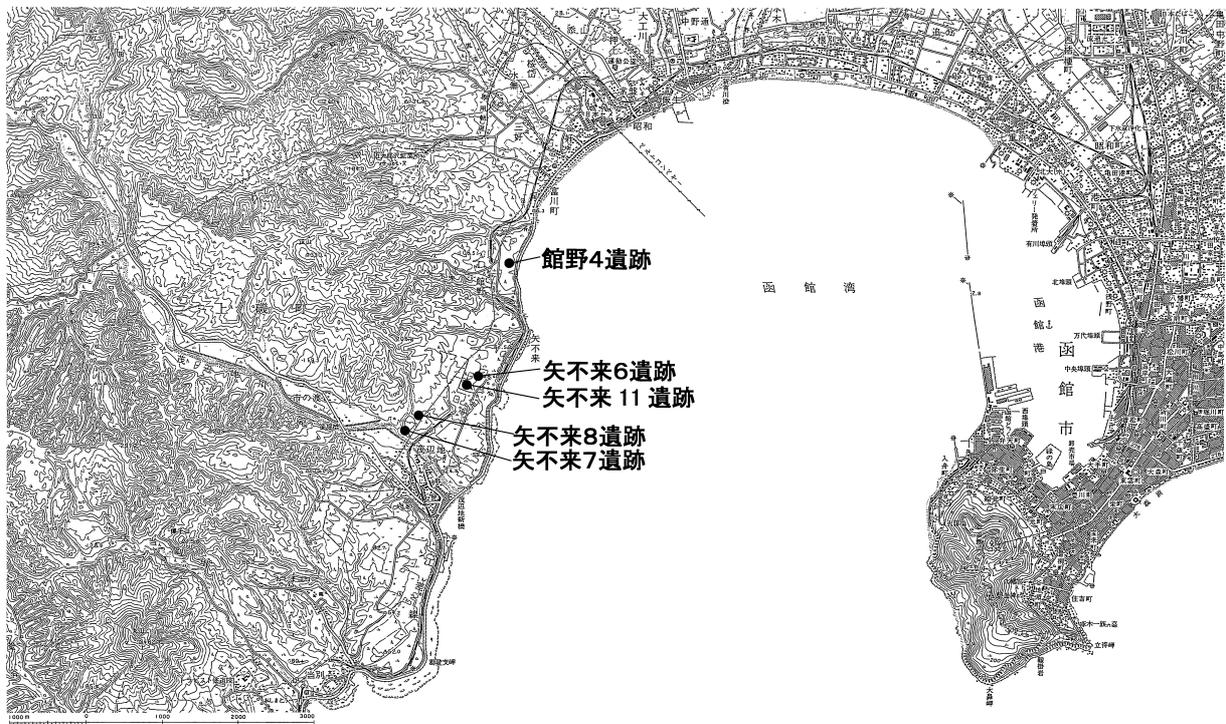
遺跡の概要

遺跡はJR上磯駅の南西約5km、函館湾に面した海岸段丘上に立地する。標高は矢不來6遺跡が57～62m、矢不來11遺跡は60～65mである。この海岸段丘は海岸線から約400mほどのところで丘陵となり、そこから幾筋もの沢が発している。矢不來11遺跡の南側には沢を挟んで矢不來10遺跡がある。また、これらの遺跡がある海岸段丘の縁辺部には、矢不來2遺跡や矢不來天満宮跡がある。

遺構と遺物

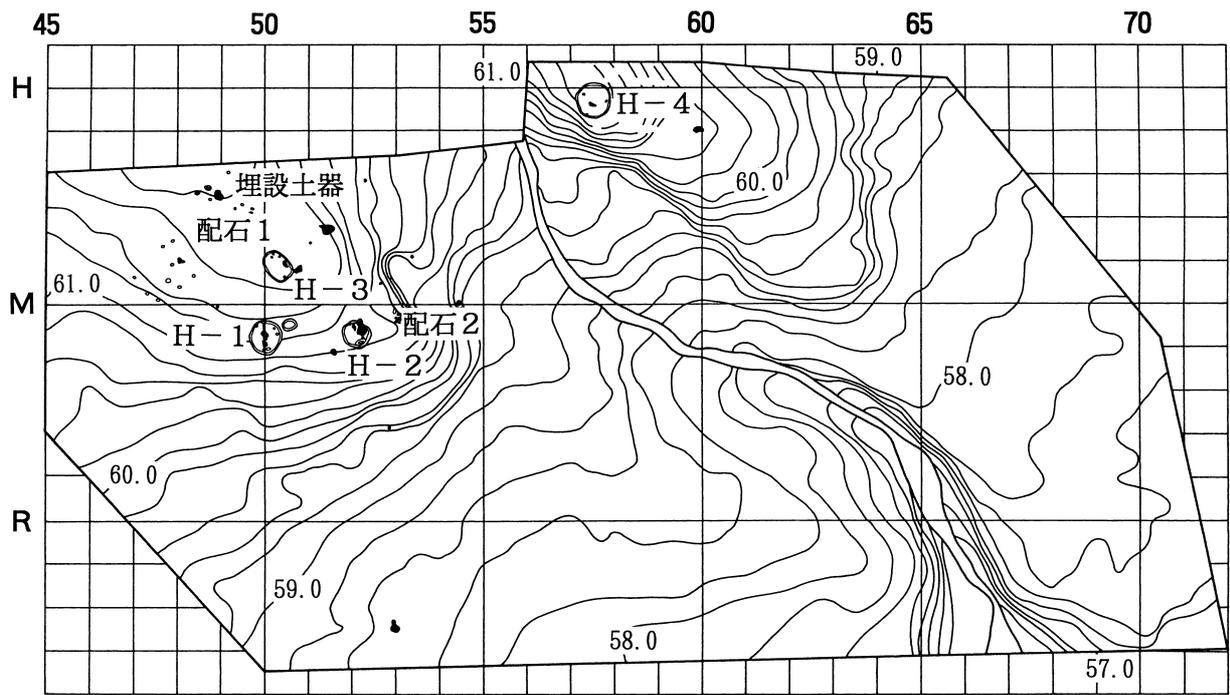
矢不來6遺跡では、住居跡4軒、土坑2基、小ピット12基、焼土20か所、埋設土器1か所、配石2か所を検出した。遺構の時期は縄文時代前期後半の円筒土器下層式期が主体である。配石などは後期の可能性がある。遺物は約13,200点出土した。土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層式、後期前葉を主体とする土器約10,100点、石器等は約3,100点である。住居跡からは縄文時代前期後半の円筒土器下層式を主体とする土器、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石核などの剥片石器、石斧、石鋸、たたき石、すり石、扁平打製石器、石皿などの礫石器が出土した。

矢不來11遺跡では、焼土5か所を検出した。遺物は約6,500点出土した。縄文時代後期前葉を主体とする土器約3,000点、石器等約3,500点である。石器はつまみ付きナイフ、スクレイパー、石核などの剥片石器、石斧、たたき石、石皿などの礫石器が出土した。



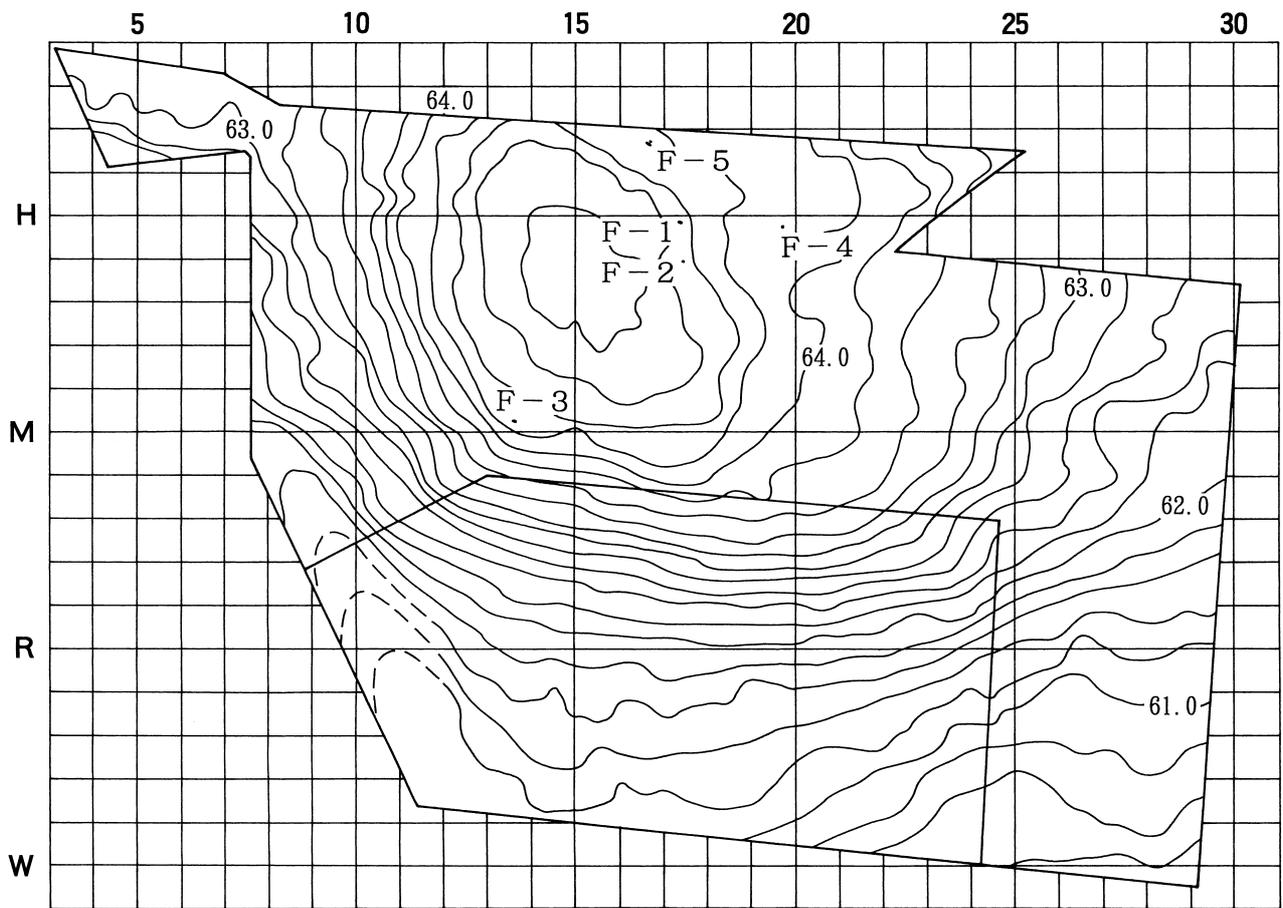
国土地理院発行の5万分の1地形図「函館」を使用

遺跡位置図



○ 土坑
 ◦ 小ピット
 ● 焼土

矢不來6遺跡 遺構位置図



矢不來11遺跡 遺構位置図

0 20m

矢不來 6 遺跡



H-1・2・3完掘



H-1 調査状況



調査状況



土層断面

矢不^{やふらい}来 7 遺跡 (B-06-62)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字矢不^{やふらい}来437-1ほか

調査面積：6,482㎡（発掘調査部分3,664㎡、遺構確認調査部分2,818㎡）

調査期間：平成17年5月9日～10月28日

調査員：佐川俊一、中山昭大、宗像公司、山中文雄

遺跡の概要

矢不^{やふらい}来 7 遺跡は、JR 茂辺地駅の北約0.8km、茂辺地川左岸段丘上に位置し、標高は25～29m（低位部分）、35～39m（高位部分）である。本遺跡から茂辺地川河口まで約1.2kmの間には、中世の館跡である国指定史跡茂別館跡、昭和7年に落合計策氏が調査し、縄文時代後期末葉の人形装飾付異形注口土器（重要文化財）が出土した茂辺地遺跡（道教委登載名称茂別遺跡）、平成3～9年度に当センターが調査を実施し、縄文時代の壕や続縄文時代の土壙墓などが確認された茂別遺跡が所在している。

基本層序は、I層（現表土）、II層（黒褐色土・中位にKo-d降下火山灰、下位にB-Tm降下火山灰を含む）、III層（暗褐色土）、IV層（漸移層）、V層（黄褐色土）である。遺物はII層からIV層の間で出土したが、本来の遺物包含層はIII層と考えられる。また、低位部分ではII層とIII層の間に竪穴住居からの掘り上げ土とその二次堆積がみられた。

なお、斜面部から高位部分にかけては、過去の耕作や植林などにより遺物包含層が消失していたため、遺構確認調査を実施した。高位部分は、平成16年度にも、2,141㎡について遺構確認調査を実施している。

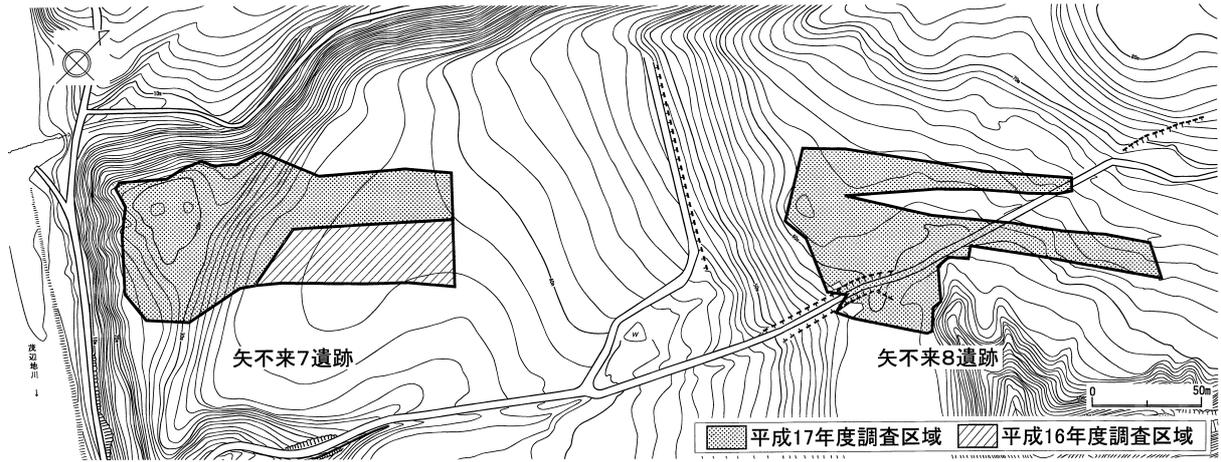
遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡13軒（H-1～13）、土壙3基（P-1～3）、石組み炉（屋外炉・FS-1）1基、焼土4基（F-1～4）、土器集中14か所（CP-1～14）、礫集中3か所（CS-1～3）が検出された。全て縄文時代のもので、土壙1基（P-3）を除き、低位段丘部分での検出である。

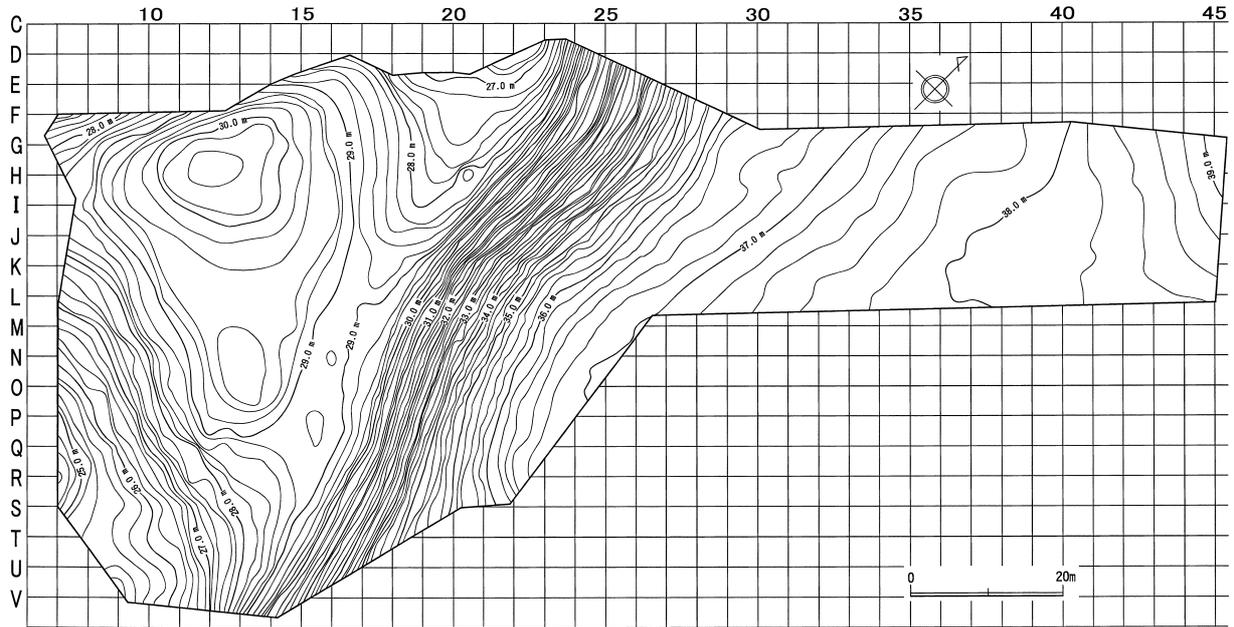
竪穴住居跡は、いずれも床面出土の遺物から後期後葉のもものと判断される。調査区の北西部に集中するが、切り合いはみられなかった。平面形は不整円～楕円形で、その一部が内側に張り出し、段状の出入り口構造を有するものが9軒（H-1・3・5～9・11・13）確認された。炉跡は、石組み炉が1軒（H-7）で検出されたが、他は全て地床炉であった。また、火災住居が5軒（H-1・2・5・10・13）あり、高い割合を示している。なお、現地表面からくぼみの状態で確認されたものが6軒（H-1・3・6・7・9・10）あり、最大で深さが約1mに達した（H-7）。

土器集中は同一個体の破片がまとまって出土したもので、主に住居跡周辺の掘り上げ土や、その直下のIII層上面で検出された。時期は後期前葉が2か所、後期後葉が12か所である。礫集中は、径2cm以下の円礫が主体である。

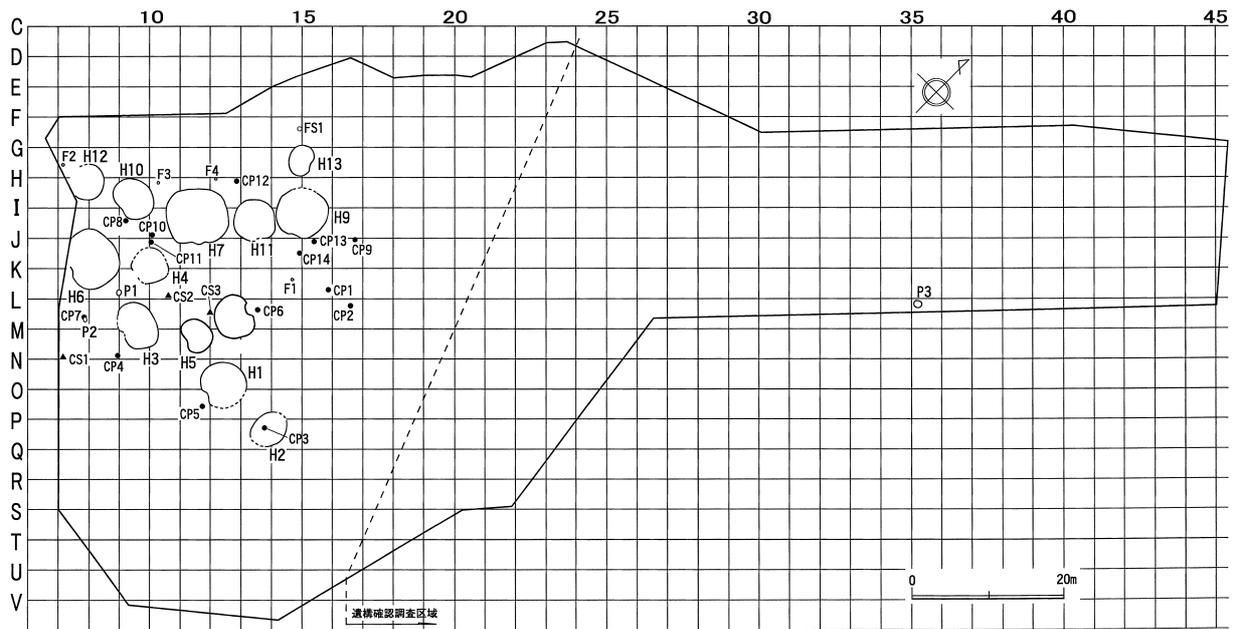
遺物は、土器、石器等総点数約47,000点で、ほとんどが低位部分から出土した。土器は全て縄文時代のもので、点数36,000点である。主体となるのは後期後葉のもので、全体の約9割に達する。他には、早期、前期、中期、後期前葉の土器が出土した。後期後葉の土器は、先に述べた土器集中の他、住居の覆土中や、床面の壁付近から、完形に近い状態で出土した例も多い。石器等は、約11,000点である。剥片石器類では、スクレイパー類、石錐・石鏃の順で比率が高く、礫石器類では砥石の比率が最も高い。石製品は、住居（H-7）の床面直上から、石棒の頭部片2点が出土した。



遺跡の位置と周辺の地形

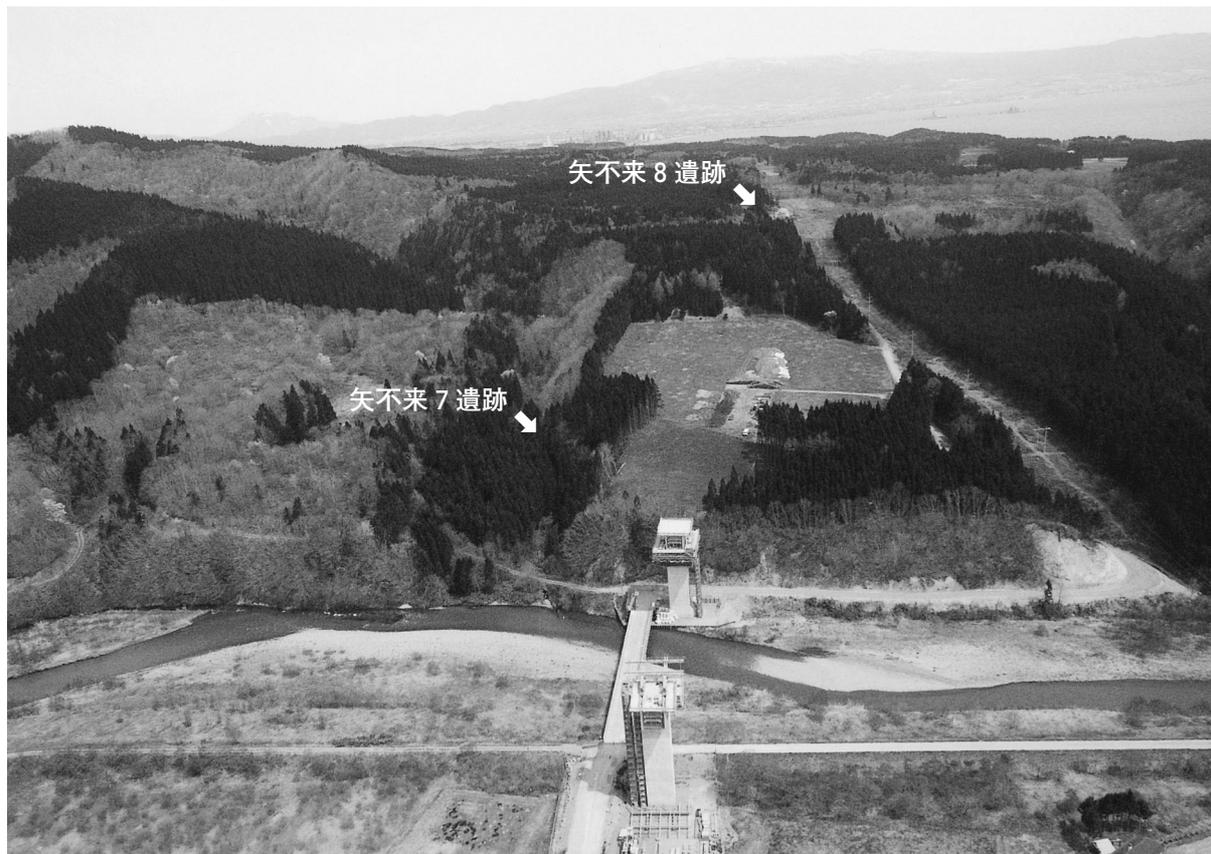


最終面（V層上面）地形図



遺構位置図

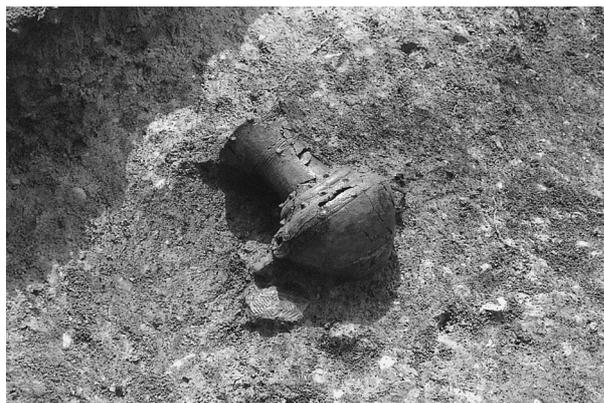
矢不來 7 遺跡



遺跡遠景



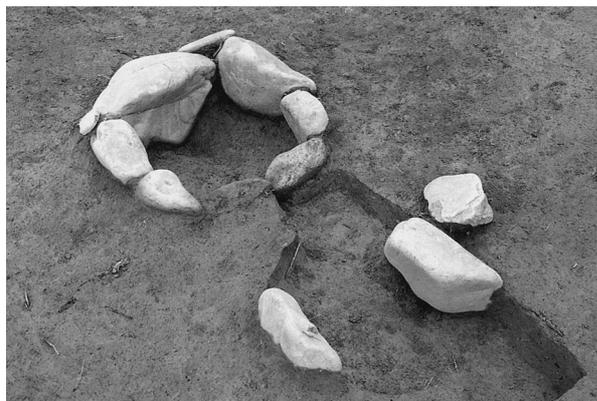
調査状況



H-1 遺物出土状況



H-11 床面遺物出土状況



FS-1 検出状況



竪穴住居跡群完掘

やふらい
矢不來 8 遺跡 (B-06-74)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字矢不來421ほか

調査面積：6,196㎡ (発掘調査部分575㎡、遺構確認調査部分5,621㎡)

発掘期間：平成17年8月8日～10月28日

調査員：佐川俊一、中山昭大、宗像公司、山中文雄

遺跡の概要

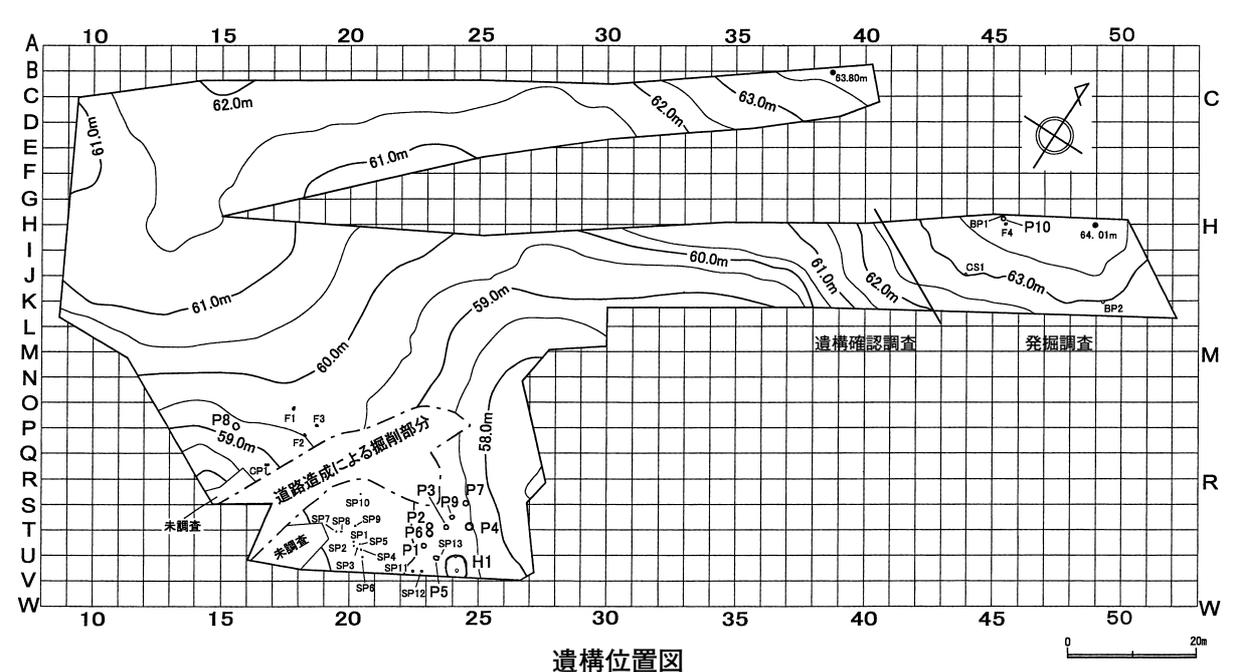
矢不來 8 遺跡は、矢不來 7 遺跡から北東へ約300m、南へ緩やかに傾斜する標高約60mの段丘上に位置する。事前に行われた試掘等の結果から、おおよそ41ラインを境に、東側は通常の発掘調査、西側は遺構確認調査が行われた。前者では縄文時代晩期の、後者では主に縄文時代中期後半から後期初頭の遺構・遺物が検出されている。土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：B-Tmの混じる暗褐色土、Ⅳ層：黒褐色土(遺物包含層)、Ⅴ層：漸移層、Ⅵ層：褐色土(地山)である。

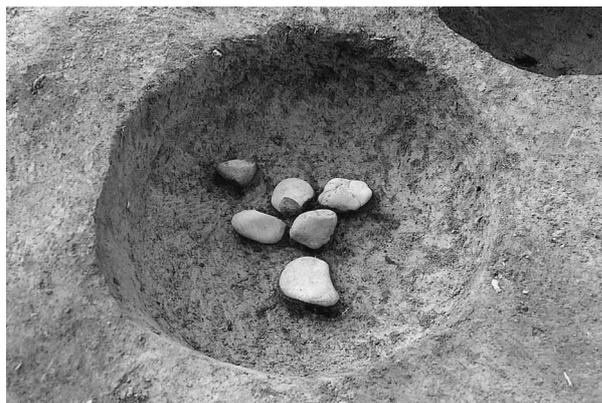
遺構と遺物

発掘調査部分で検出された遺構は、縄文時代晩期の埋設土器2基(BP-1・2)をはじめ、同時期とみられる土坑1基(P-10)、焼土1か所(F-4)、礫集中1か所(CS-1)である。埋設土器は両者とも標高63~64mの調査区内では比較的高い部分に位置する。器形はBP1が壺形、BP2が深鉢形である。

遺構確認調査部分では、南側の標高59m前後の地点に遺構のまとまりがあり、竪穴住居跡1軒(H-1)、土坑9基(P-1~9)、柱穴様の小土坑13か所(SP-1~13)が調査されている。時期はいずれも縄文時代中期後半頃と推定される。住居跡の床面近くには炭化材が目立ち、土坑は底面近くに礫のあるものが多い。このほか、遺構確認調査範囲の一部で包含層の残存が確認され、そこから縄文時代後期初頭の焼土3か所(F-1~3)、続縄文時代前半の土器破片集中1か所(CP-1)が検出されている。

遺物点数は土器約5,000点、石器等約600点である。発掘調査部分の遺物は縄文時代晩期のものがほとんどで、わずかに前期、中期のものがみられる。前述した包含層の残存部分からは、縄文時代後期初頭の遺物が多く得られている。





P-6 礫出土状況



BP-1 検出状況



H-1 炭化材出土状況



調査終了状況 (発掘調査部分)

たての 館野4遺跡（B-06-49）

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字館野17-30ほか

調査面積：7,100㎡

発掘期間：平成17年9月1日～10月27日

調査員：工藤研治、鎌田 望、福井淳一、柳瀬由佳

遺跡の概要

遺跡はJR上磯駅の南西約3km、函館湾を望む海岸段丘の縁に立地する。標高は47～55mである。北には平成15・16年度に当センターが調査を行なった館野遺跡、南には昭和55年に北海道教育委員会と上磯町教育委員会により工事立会が行なわれた館野2遺跡があり、それぞれ沢で隔てられている。

遺構と遺物

遺構は、住居跡9軒、土坑78基、Tピット7基、小ピット94基、焼土30か所、石囲い炉3基、埋設土器3か所を検出した。Tピット以外の遺構は発掘区の12ラインより南側に集中していた。

住居跡は、いずれも縄文時代中期前半の円筒土器上層式期のものである。そのうちの2軒は焼失住居跡である。構造材の一部とみられる炭化材を検出した。また、これらの住居跡の覆土上位では焼土や石囲い炉のほか多数の礫を検出した。

土坑は径1m前後、確認面からの深さは30～50cmである。十数点の礫が入れているものもあった。小ピットは径、確認面からの深さとも20cmほどである。

Tピットは調査区北側で検出した。規模や形状から次の二つのタイプに分けられる。長さ約1.5m、幅20cm未満、深さ1m以上のタイプが5基、長さ約2.5m、幅約30cm、深さ約40cmのタイプが2基である。この周囲は地下水位が高い環境であり、ロームがグライ化していた。そのため、幅の狭いタイプは調査中に湧水のため水没した。

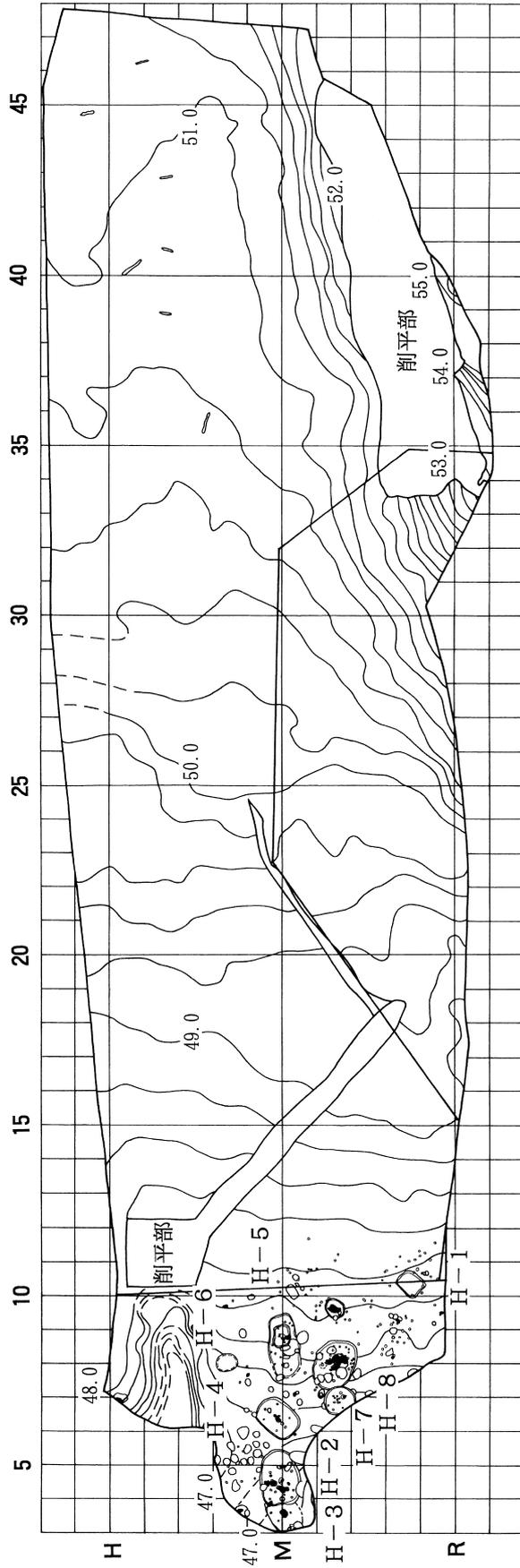
遺物は約20,700点出土した。土器約15,500点（遺構約5,500点、遺物包含層約10,000点）、石器等約5,200点（遺構約2,200点、遺物包含層約3,000点）である。

土器には縄文時代中期前半の円筒土器上層式および後期前葉のものを主体に、早期後半、前期後半、中期後半、後期中葉、後期後葉のものがある。

石器には石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、石錐、篋状石器、スクレイパー、両面調整石器、楔形石器、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石核、原石、石斧、たたき石、すり石、扁平打製石器、北海道式石冠、台石、石皿、石錘などがある。

住居跡からは縄文時代中期前半の円筒土器上層式を主体とする土器、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器などの剥片石器、石斧、たたき石、扁平打製石器などの礫石器が出土しており、特にスクレイパーと礫石器が多い。

遺物包含層からは縄文時代後期前葉を主体とする土器、石鏃、つまみ付きナイフ、両面調整石器、スクレイパー、石核などの剥片石器、石斧、たたき石、扁平打製石器などの礫石器が出土している。特に、スクレイパー、石核、扁平打製石器の出土が目立つ。



- 土坑
- ∩ Tピット
- 小ピット
- 焼土

遺構位置図

館野 4 遺跡



調査区南部の遺構集中区



TH-6 完掘



TH-2・3完掘



TH-2床面遺物出土状況



TH-2床面遺物出土状況



TP-38遺物出土状況



TP-25遺物出土状況

たての 館野遺跡（B-06-15）

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字館野3-3ほか

調査面積：8,565㎡（平成15年5,750㎡、平成16年2,815㎡）

整理期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日

調査員：佐川俊一、中山昭大、富永勝也

遺跡の概要

発掘調査は平成16年度に終了し、現在は平成15年度調査分の整理作業を行っている。縄文時代中期末から後期初頭にかけての遺構・遺物が主として検出されており、15年度分の遺物点数は遺構から83,088点、包含層から355,164点で合計438,252点（土器は388,731点、石器は40,880点、その他8,641点）である。遺構は竪穴住居跡40軒、土坑54基、石囲い炉10基、焼土56基、石組13基、Tピット7基が検出されている（上磯町教育委員会が調査を担当した工事立会部分の竪穴住居跡3軒、土坑4基を含む）。縄文時代中期末から後期にかけての竪穴住居跡の変遷など検討しているが、これらは15年度分の本報告で成果を報告したい。遺物整理が進み15年度分の全体像が把握されてきたこともあり、ここでは16年度調査で確認された後期初頭の配石盛土遺構がこれら遺構や遺物とどのような関わりをもつものか整理したい（図3）。

石組は畑の耕作による抜きとりで配列の原形が確認できなかったが、直線状のものは16年度に確認された南北の配石遺構の開口部付近にあり、同時期に意図して配置されたものと考えられる。

土坑のうちフラスコ状のものは、直線状の活断層に沿って2列に配置され、断層の段差による自然地形が、遺構の配置に利用されていることがわかる。

盛土は、調査時には近代の土地改変による削平と埋め立てや、近世の畑の畝で攪乱され、従来の面影はみられなかったが、遺物は南北に分かれてまとまって出土する傾向がみられた。図4に示したものは包含層Ⅲ層から出土した土器237,902点の分布密度を表したもので、北側と南側の盛土延長部分と考えられる範囲が明瞭に認識される。北側は活断層に沿って遺物が出土し、南側はそれに平行して遺物が分布している。最も南側に位置する部分は、近代に池が造られ寸断されている。

海に向かって直線的に伸びていく盛土の類例には、上磯町茂別遺跡（北埋調報121）で、壕の掘り上げ土と報告された同時期のものがある。その大きさは窪地の幅が20～30m、長さが約120m確認されている。位置的に近い海岸段丘上にあり、何らかの関連性があると推定される。

石囲い炉（屋外炉）は南北の盛土付近にみられ、焼土も同様の傾向を示している。平成14年度に調査された森町倉知川右岸遺跡（北埋調報196）では、館野遺跡よりやや新しいが、配石遺構を取り巻く石囲い炉の分布や、それに囲まれる中央部分の造成土など興味深い報告がされ、この時期の道南部沿岸の遺跡に共通性が考えられる。

整理の内容

整理作業は包含層の土器接合、遺構・包含層の土器復元、破片資料については拓影図作成、各復元個体の実測、土器・石器接合状況の図版作成、遺物・遺構のデータ整理（分類変更・集計作業）が主な内容で、自然遺物の選別作業なども行った。

今後、遺物の写真撮影、挿図、写真図版の作成、編集作業を行う予定である。遺物の接合状況や年代測定結果の新知見等に加え、各竪穴住居跡の時間差を考察していきたい。なお、15年度分（町教委の工事立会部分を含む）の報告書は次年度に刊行する予定である。



図1 遺跡位置図

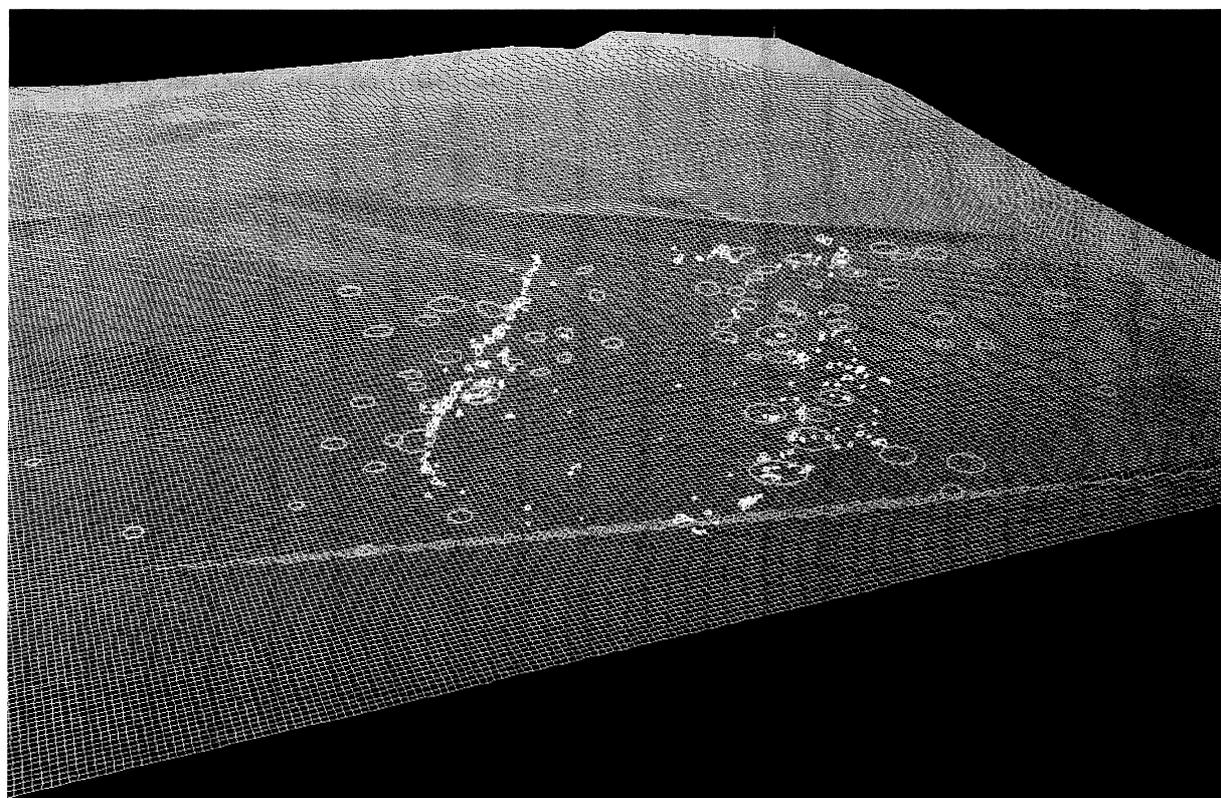
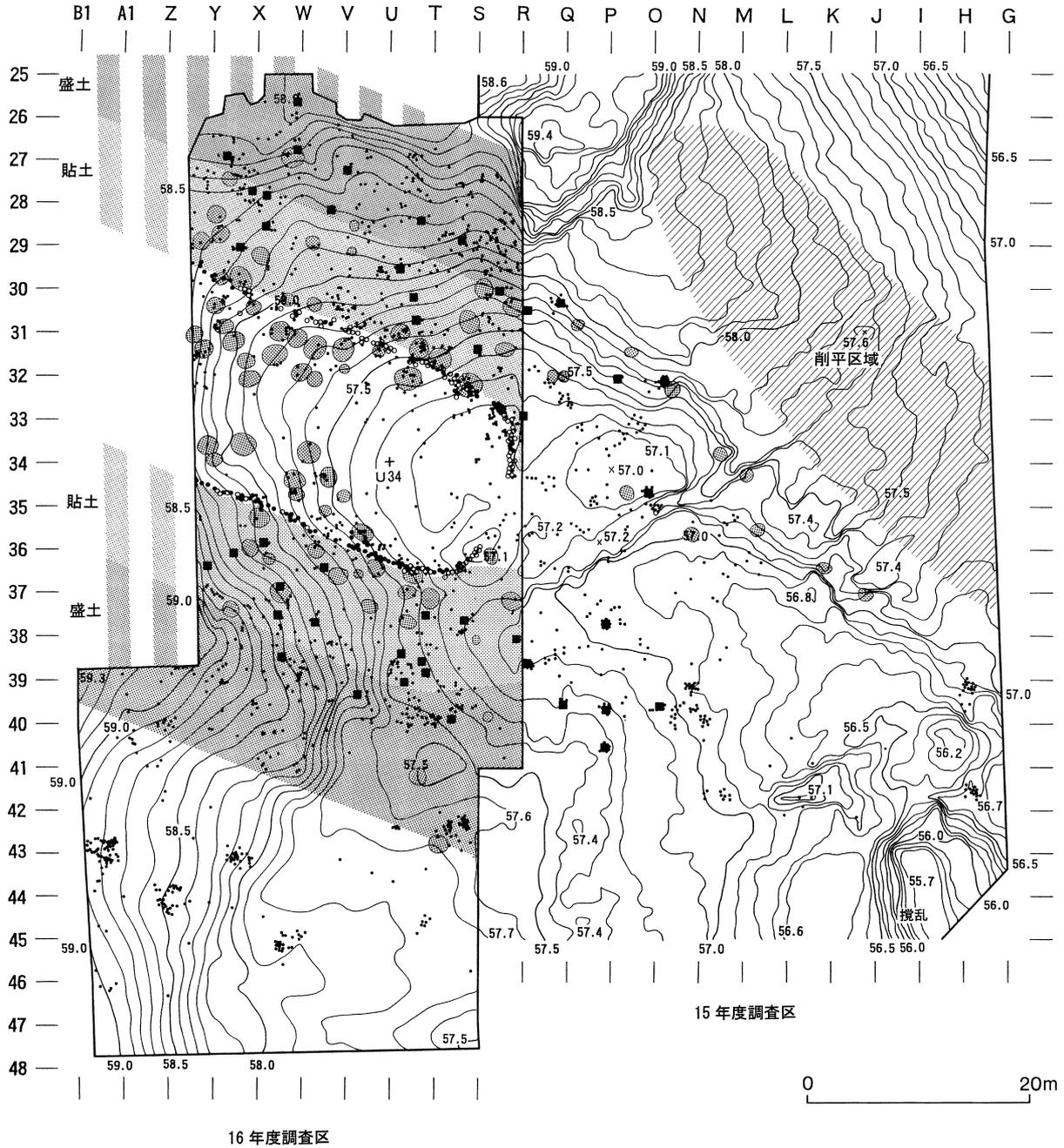
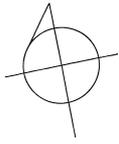


図2 配石盛土遺構3 鳥瞰図

(株)シン技術コンサル トータルステーション観測データより



凡例

- 礫
- 配石抜け痕
- 石囲い炉
- ⊙ フラスコビット

基準杭U34 世界測地系

緯度 (B) 41-48-00.9591 X = -244,280.620

経度 (L) 140-37-01.2744 Y = 30,499.820

日本測地系

緯度 (B) 41-47-51.7394 X = -244,536.920

経度 (L) 140-37-14.0879 Y = 30,793.119

図3 配石盛土関連遺構の配置図

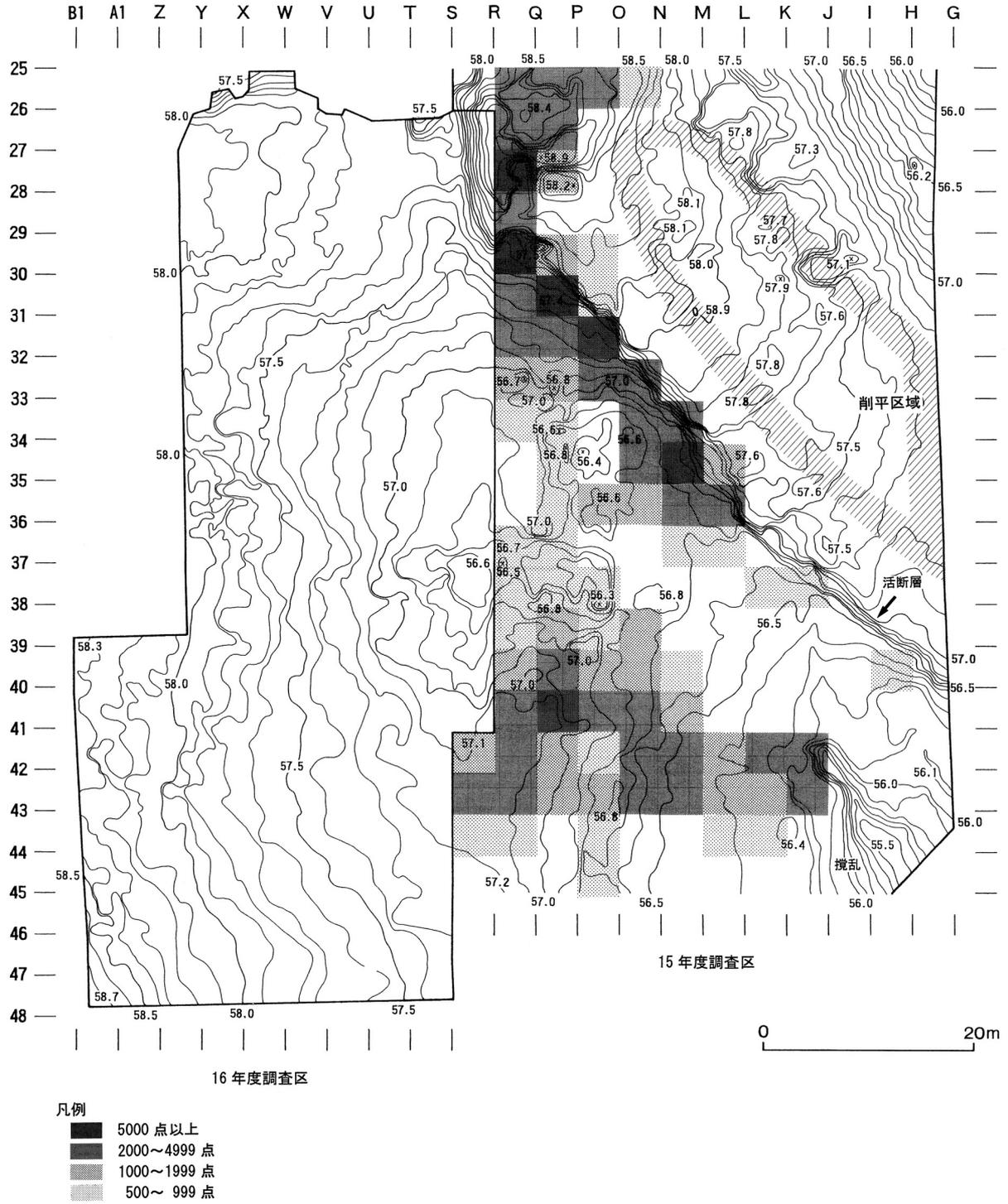
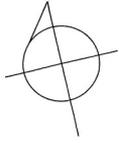


図4 Ⅲ層の土器出土分布図

リヤムナイ 3 遺跡 (D-12-29)・上^{かみ}リヤムナイ遺跡 (D-12-2)

事業名：一般国道276号岩内共和道路工事

委託者：国土交通省北海道開発局小樽開発建設部

所在地：岩内郡共和町字梨野舞納ほか (リヤムナイ 3)、字梨野舞納70-1ほか (上リヤムナイ)

調査面積：6,100㎡ (リヤムナイ 3)、1,300㎡ (上リヤムナイ)

調査期間：平成17年5月6日～平成17年10月28日

調査員：遠藤香澄、笠原 興、袖岡淳子

遺跡の概要

リヤムナイ 3 遺跡は共和町の西端、日本海に面した標高約 7 m の海岸砂丘地帯に位置しており、岩内町の市街地からは国道229号線を泊方面に約 4 km の地点にある。

遺跡のある梨野舞納地区は南側を岩内町、北側は泊村とほぼ隣接し、遺跡の南東側には標高約 25 m の海岸段丘の端部とも接している。この段丘上に上リヤムナイ遺跡がある。上リヤムナイ遺跡は北海道指定史跡である東山遺跡と同じ丘陵の延長にあり、舌状に突出した段丘の末端に立地している。

「リヤムナイ」とはアイヌ語で、「越冬する川」等の意味がある。リヤムナイ川は堀株川の支流で「秋から来春まで年越しして鮭を漁ることが出来たため」という由来がある。調査は16年度から行なわれ、昨年の調査範囲は3,500㎡であった。遺構や遺物等は調査区の東端に多く、今年度はこれに連続する6,100㎡を調査した。その結果、昨年度の調査区との境界附近を主体に多くの遺構や遺物を検出した。また調査区の南東側には遺跡を縦断するように流れる河道跡も確認した。土層は主に黄橙色の細粒砂層とその下位の灰褐色の砂層で構成され、下位はラミナの発達が著しい。

遺構と遺物

リヤムナイ 3 遺跡で検出した遺構は焼土が59か所、集石15か所、剥片集中63か所、石器集中1か所、炭化物集中1か所である。これらの遺構を含む包含層は数枚あって、所属時期に時間幅があると考えられるが、ほぼ縄文時代前期前半期にかけてのものである。

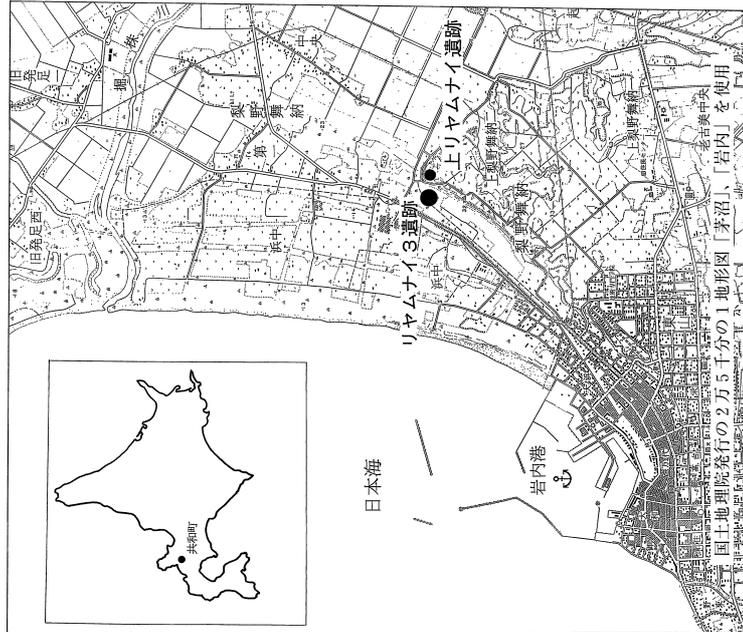
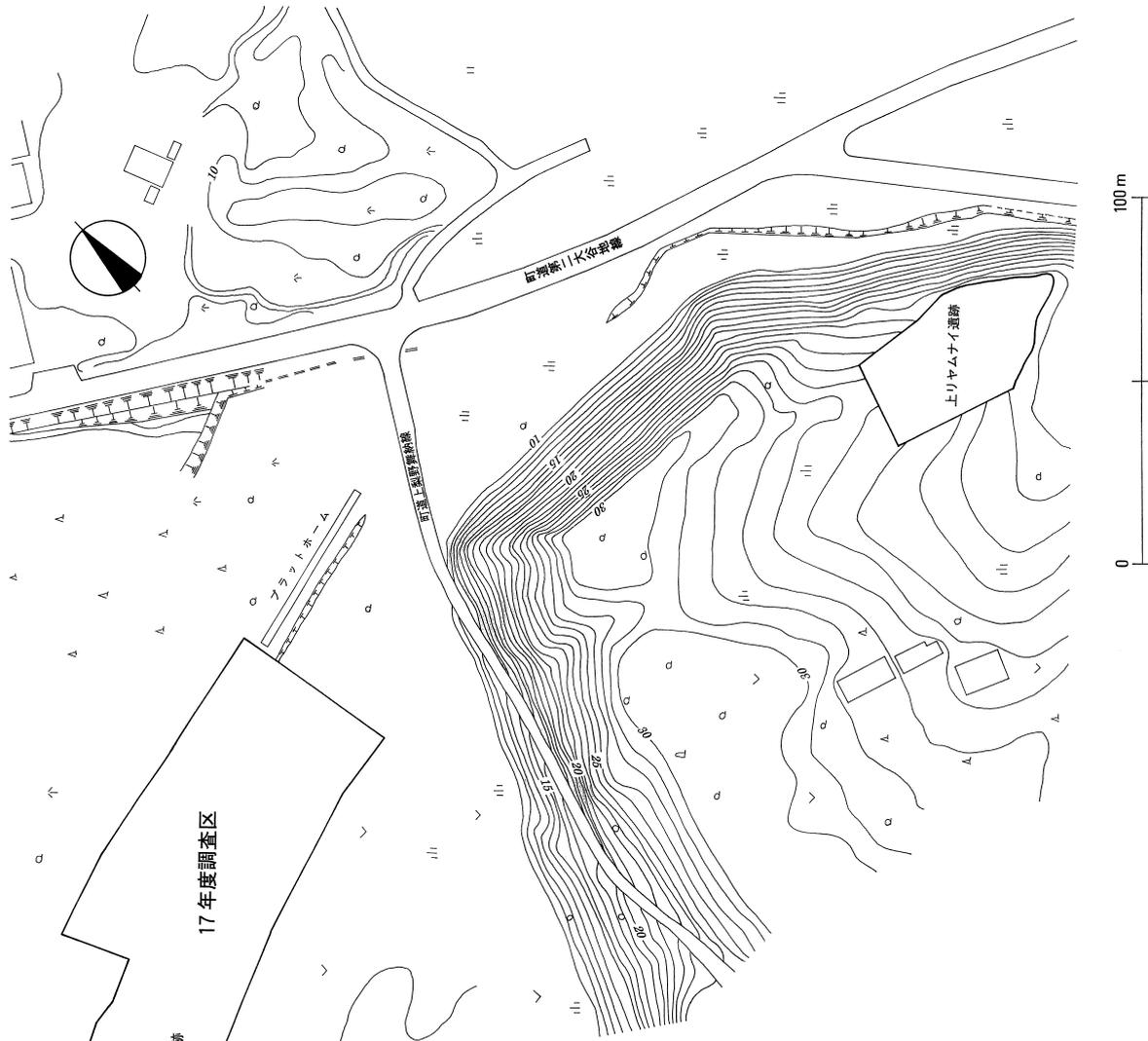
遺物は土器が34,300点、石器等3,600点、剥片が148,000点出土した。土器は前期前半の道南部の春日町式に相当する押引文や刺突文、羽状縄文、縄文の施された土器群で、尖底のものが主体で平底はわずかである。これらの中には尖底部に黒曜石が埋め込まれた土器が1点出土している。また、このほかに東北地方から持ち込まれたと見られる大木式土器も出土した。

石器はスクレイパーとたたき石の出土が多い。中でもスクレイパーは剥片の端部に急角度の刃部を作成するものが目立つ。石器製作に関わる剥片 (フレイクチップ) ではそのほとんどを頁岩が占め、黒曜石の剥片は2割に満たない。この他にも骨片等も採取され、その多くが海獣類を含む獣骨片である可能性が高い。また、大型の石鏃やスクレイパー、石斧、赤鉄鉱の原石等がまとまって出土した「石器集中」は、総点数が約300点を数える特徴的な遺構である。

上リヤムナイ遺跡は1956年に大場利夫等によりトレンチ調査が行なわれており、今回の調査範囲はその東側にあたる。1956年の調査では、下層から旧石器時代の遺物と考えられるものが出土し、上層からは円筒土器下層式等の遺物が見つかったと報告されている。(大場・桐井1958『岩内遺跡』)。

今回の調査で検出された遺構は、420点ほどの黒曜石の剥片で構成される剥片集中が1か所、頁岩の剥片集中1か所である。遺物は石鏃、石皿、すり石等の石器や剥片を合わせて830点出土した。

石器の形態等から遺構、遺物ともに縄文時代早期に属するものと考えられる。包含層から土器は出土していない。

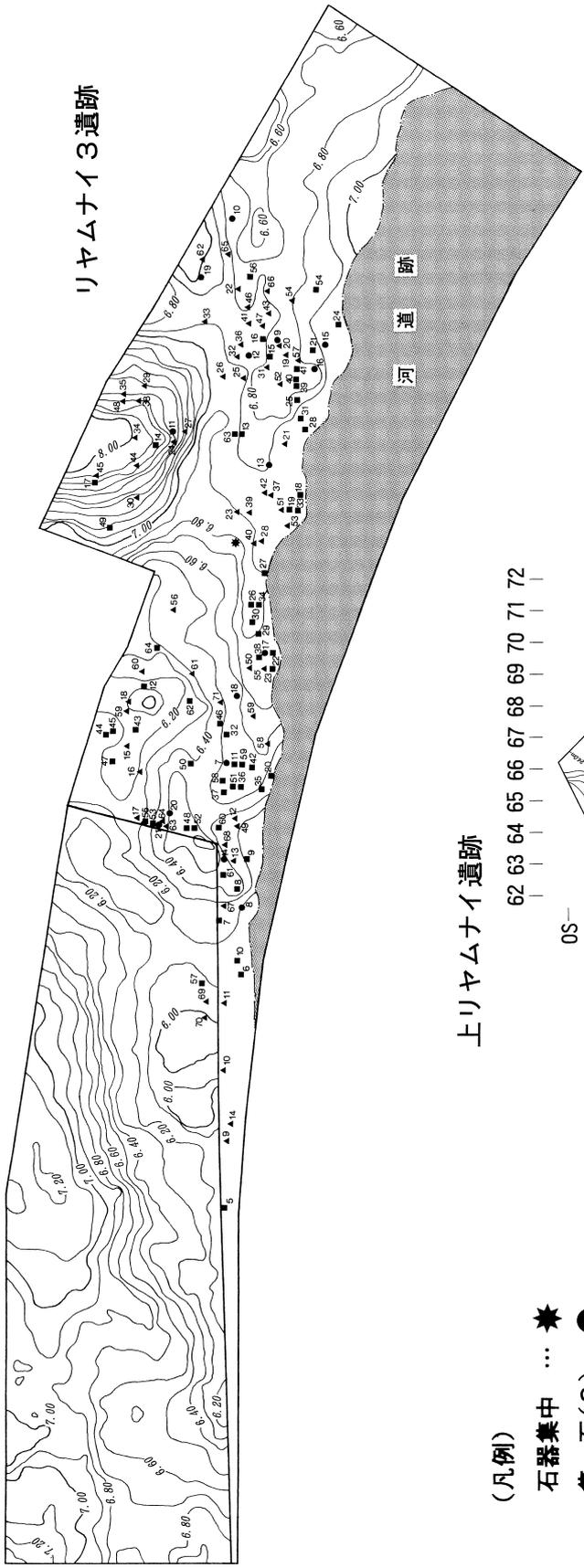


遺跡と周辺の地形



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S



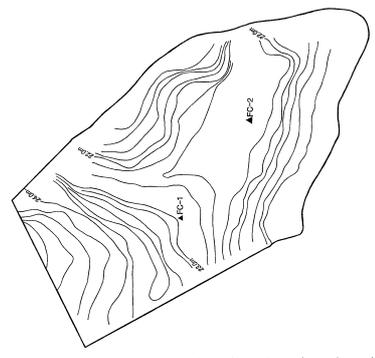
リヤムナイ3遺跡

河道跡

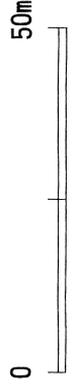
上リヤムナイ遺跡

62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72

OS-
OT-
OU-
OV-
OW-
OX-
OY-
OZ-
a-
b-
c-



遺構位置図



(凡例)

- 石器集中 ... ★
- 集石(S)... ●
- フレイクチップ集中(FC)... ▲
- 焼土(F)... ■



リヤムナイ3遺跡 調査状況



リヤムナイ3遺跡 石器集中検出状況



リヤムナイ3遺跡 尖底土器出土状況



上リヤムナイ遺跡 全景



上リヤムナイ遺跡 FC-1 検出状況

大町2遺跡（J-11-7）

事業名：一般国道234号早来バイパス建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：早来町大町137ほか

調査面積：2,400㎡

発掘期間：平成17年5月9日～8月12日

調査員：熊谷仁志、谷島由貴、坂本尚史、佐藤 剛

遺跡の概要

大町2遺跡は、JR早来駅から北東0.8kmの大町地区市街地の北東端に位置する。馬追（まおい）丘陵の南側を流れる安平川の支流であるニタツポロ川左岸の河岸段丘上にあり、標高20m付近に立地する。調査は昨年度に引き続き2年目で、今年度で完了する。本河川流域では昭和49・50年度に支安平川の左岸に位置する安平A遺跡が調査され、続縄文時代前半期の後北式期の土坑墓などが見つかった。また、早来町史によれば本遺跡からは縄文時代晩期末の完形の壺が採集されている。

基本層序は、Ⅰ層（表土、耕作土）、Ⅱ層（樽前b降下軽石：Ta-b 西暦1667年降下）、Ⅲ層（「第Ⅰ黒色土層」相当：縄文時代晩期～アイヌ文化期）、Ⅳ層（樽前c降下軽石：Ta-c 約2,500年前降下）、Ⅴ層（「第Ⅱ黒色土層」相当：縄文時代前期～晩期）、Ⅵ層（漸移層：縄文時代早期）、Ⅶ層（樽前d降下軽石：Ta-d 約7,300年前降下）である。Ⅰ層とⅡ層の間には、遺跡の東端部で部分的に降下樽前a降下軽石（Ta-a 西暦1739年降下）とその下に「第0黒色土層」相当がみられる。またⅢ層中では、風倒木の落ち込みなどに部分的に白頭山－苦小牧火山灰（B-Tm：10世紀中葉降下）を検出した。

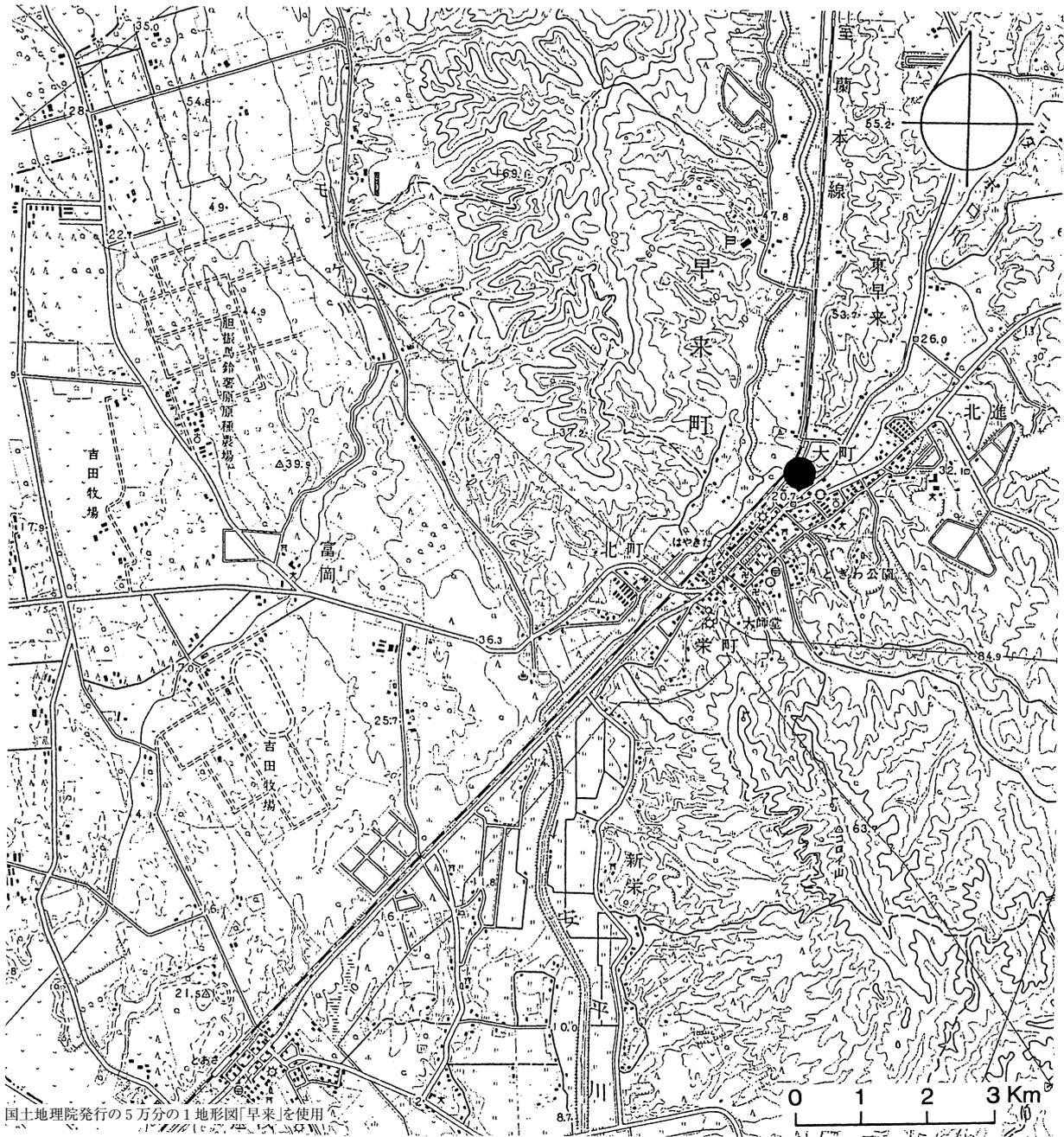
遺構と遺物

遺構は、Ⅲ層から土坑15基（11、カッコ内は今年度、以下同）、柱穴11か所（4）、集石15か所（5）、焼土26か所（19）、炭化物集中4か所（2）、土器やフレイク・チップの遺物集中地点58か所（30）が見つかった。大半は続縄文時代前半期末の後北C₁式期のものと考えられ、次いでアイヌ文化期のものがある。Ⅴ層からは竪穴住居跡4軒（2）、土坑36基（17）、Tピット10基（6）、集石23か所（16）、焼土95か所（38）、土器やフレイク・チップの遺物集中地点37か所（22）が見つかった。縄文時代後期～晩期が主体である。

Ⅲ層の焼土には、刀子を伴うものがあり周辺から集石が見つまっている。後北C₁式期のものでは、周辺で土器や黒曜石・粘板岩のフレイク・チップを確認した。今年度調査した中には、骨片が多量に含まれているものがある。また縄文時代晩期後葉では、墓の可能性の高い土坑群を確認した。

Ⅴ層の竪穴住居は縄文時代後期前半頃のもの2軒確認した。縄文時代晩期後葉では、墓の可能性の高い土坑群を確認し、周辺では遺物が濃密に分布していた。また今年度は、昨年未確認だった早期中葉の遺構として、焼土を確認した。

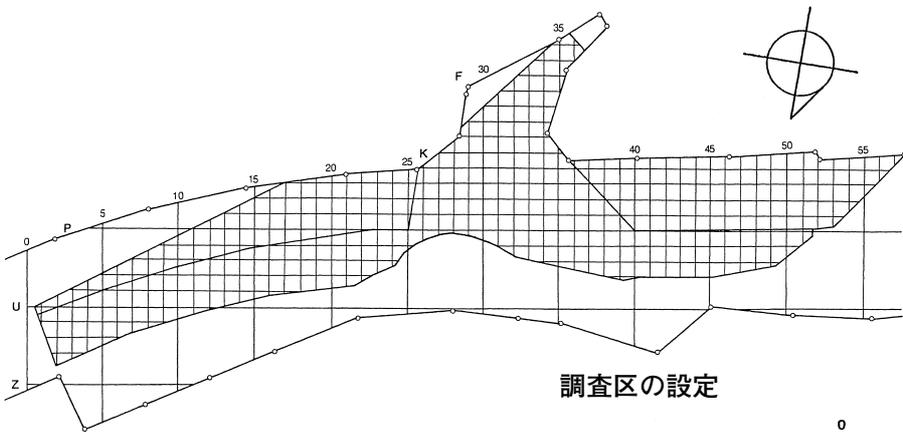
今年度の遺物は概算でコンテナ（59×39×15cm）80箱、昨年度と合わせると160箱で、総計約20万点である。Ⅲ層からは後北C₁式や縄文時代晩期末のタンネトウL式土器、黒曜石や粘板岩製の石鏃などの石器、刀子などの鉄製品が出土している。また、早来町内の遺跡では初めて、擦文土器、ふいごの羽口（時期は今後の検討による）が出土した。現在までのところ、石器類の特徴としては黒曜石製の石鏃の出土量が突出していることが判明している。Ⅴ層からは縄文時代早期中葉、後期前葉～中葉、晩期などの土器が出土しており、主体は晩期後半のタンネトウL式である。石器は石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、石製品などが出土している。



遺跡位置図

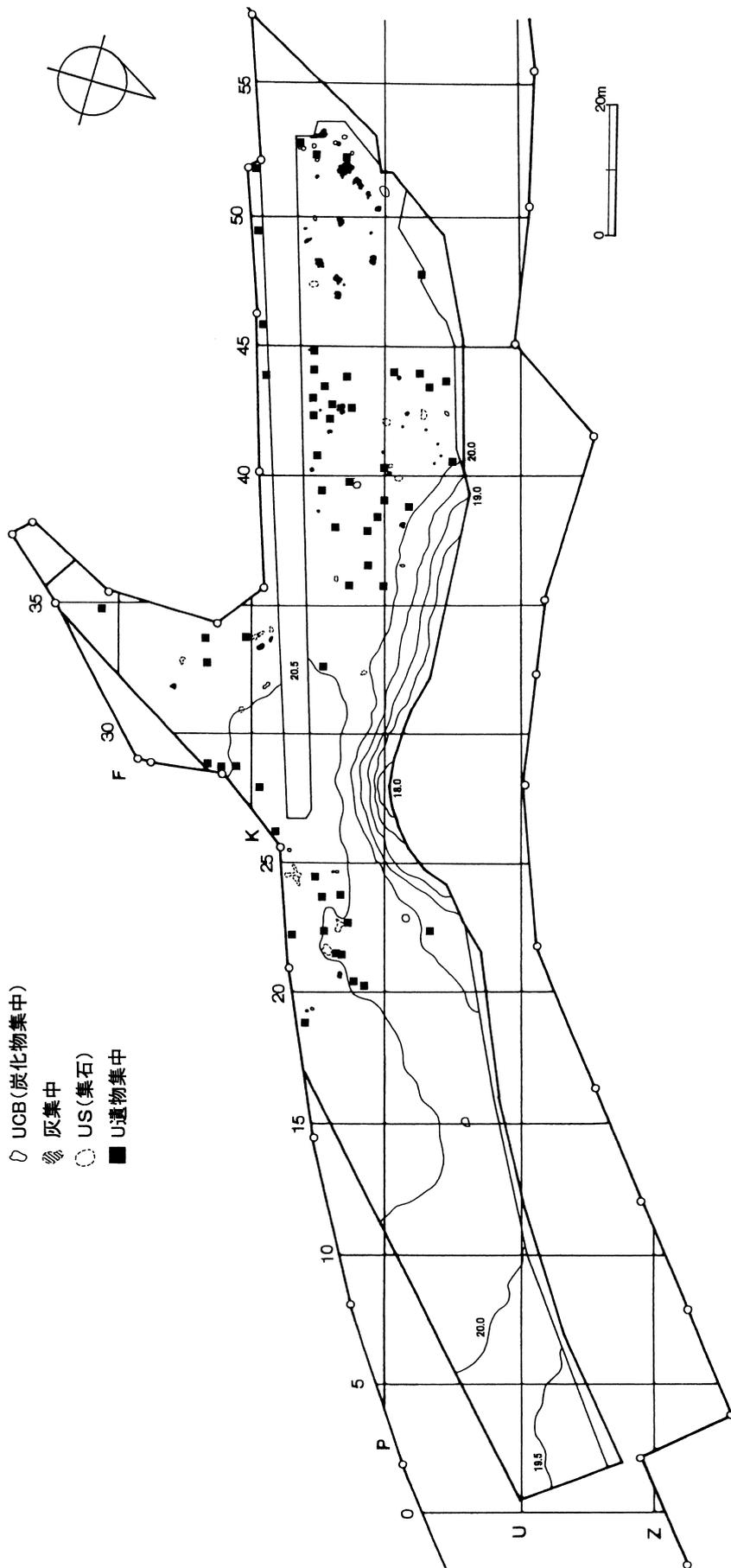
土層模式図

I層(表土、耕作土)
樽前a降下軽石層:Ta-a
第0黒色土層(相当層)
II層(樽前b降下軽石:Ta-b)
III層(第I黒色土層)相当
苦小牧-白頭山火山灰(B-Tm)
IV層(樽前c降下軽石:Ta-c)
V層(第II黒色土層)相当
VI層(漸移層)
VII層(樽前d降下軽石:Ta-d)



調査区の設定

- UP(土坑)
- USP(小土坑)
- UF(焼土)
- ◇ UCB(炭化物集中)
- ☼ 灰集中
- US(集石)
- U遺物集中



Ⅲ層検出遺構配置図



焼土（アイヌ文化期）刀子出土状況



焼土（縄文時代）検出状況



竪穴住居跡（縄文時代後期前葉）検出状況

とうよう 東陽1遺跡 (M-02-25)

事業名：一般国道44号釧路町釧路外環状道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部

所在地：釧路郡釧路町字別保原野南23線48-1ほか

調査面積：382㎡

発掘期間：平成17年7月12日～平成17年10月31日

調査員：高橋和樹、越田雅司、影浦 覚

遺跡の概要

遺跡はJR釧路駅から東北東へ約5km離れた標高27～31mの段丘上に位置する。別保原野の北側に広がる台地の先端部分に立地し、西北西に約1km離れたテンネル式の標識遺跡とは同じ台地上である。基本土層は地表面からⅠ：表土層、Ⅱ：にぶい黄橙色火山灰層、Ⅲ：黒色土層、Ⅳ：黒褐色土層、Ⅴ：漸移層、Ⅵ：明黄褐色砂質土層、Ⅶ：黄色ローム質土層となっている。Ⅱは層厚5cm程度であるが、上層が樽前a火山灰（1739年降灰）、下層が駒ヶ岳c₂火山灰（1694年降灰）の可能性がある。主な遺物包含層はⅣ層下位～Ⅵ層である。調査区の地形は北側の台地上平坦面と南側の斜面部分からなるが、遺構・遺物は北側の台地上において検出された。出土土器は全点が縄文時代早期前葉のテンネル式（古段階）である。遺構や出土石器等も同時期の所産と考えられる。

遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑3基、黒曜石のフレイク集中1か所である。竪穴住居跡や土坑の覆土中に樽前d火山灰の堆積が観察されたことから、これらの遺構の構築時期は樽前d火山灰の降灰以前である。竪穴住居跡は隅丸方形に近い形状で、支柱穴と考えられる柱跡が1か所ともなう。いずれも床面中央に炉跡と考えられる焼土が検出された。面積は10㎡前後で、六～八畳間程度の広さである。土坑3基は、貯蔵穴のようなもの（P-1）、竪穴のようなもの（P-2）、性格不明の浅い掘り込み（P-3）と、形状や規模がそれぞれ異なる。P-2は竪穴住居としてもいいほどの規模であったが、柱穴および炉が確認されなかったことから土坑の扱いとした。P-3は木根とキツネの巣穴によって大きく破壊されている。フレイク集中は刃部再生の作業にともなった微細フレイクの廃棄場所と考えられる。最大0.4g、最小は0.1g未満のフレイクからなり、全重量は約7gである。

土器は920点が出土した。全点テンネル式であるが、微細な破片が大半で、個体復元できるものはない。模様を判別できる資料を見る限り、無文地に径4mmの刺突が間隔を空けながら巡るものと、条痕が土器の内外面に施されているものがある。また、胎土には多量の繊維が含まれているものがある。

石器等は礫・礫片を除いて291点が出土した。うち232点はフレイク、2点は石核である。石器は剥片石器27点、礫石器30点に分けられ、スクレイパー、Uフレイク、石錘が多い。剥片石器の素材は黒曜石であるが、スクレイパー、Uフレイク等を見る限り、縦長の剥片を加工したものと、原石を半球状に打ち割ったものから、円形の剥片を採取して縁辺に加工を加えたものが多く見られる。石鏃は2点しか出土していないが、いずれも三角形平基であった。石斧は出土していない。礫石器は30点中21点が石錘であるが、ほとんどが短軸に打ち欠きを加えたタイプであった。長軸の一端にも打ち欠きないし敲打を加え三抉になっている例も若干見られる。これらの石器はテンネル式（古段階）を主体とした他の遺跡でも見られ、特徴的な石器組成として理解される。

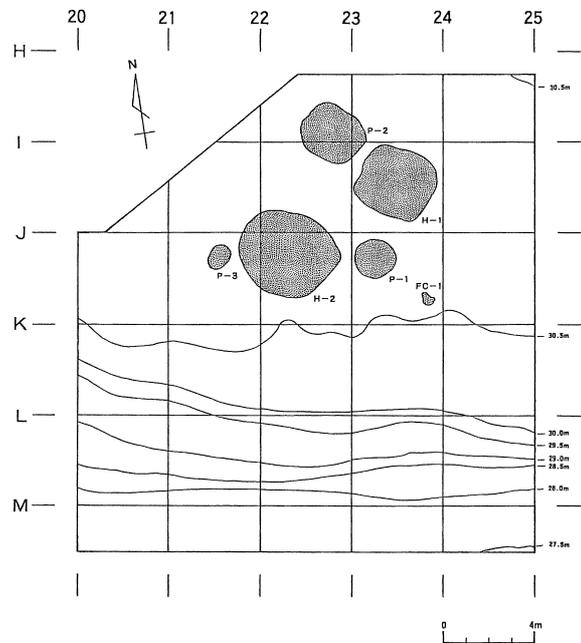
なお、調査範囲の南側斜面部に近現代のものと考えられる道の跡が検出され、調査範囲外の西側には地形改変された場所が確認されている。太平洋戦争末期に日本軍が本土決戦に備えて砲台等の陣地的な施設を構築した可能性が考えられる遺構である。



遺跡位置図

基本土層柱状模式図 (K24区)

I層	表土。層厚20cm。 黒褐色土。
II層	火山灰層。層厚5cm。 にぶい黄橙色。
III層	腐植土層。層厚10cm。 黒色土。
IV層	腐植土層。層厚20~30cm。 黒褐色土。
V層	漸移層。層厚15cm。 暗褐色土。
VI層	砂質土層。層厚10~20cm。 明黄褐色。
VII層	ローム質土層。黄色。



遺構分布図 (等高線は最終面地形)

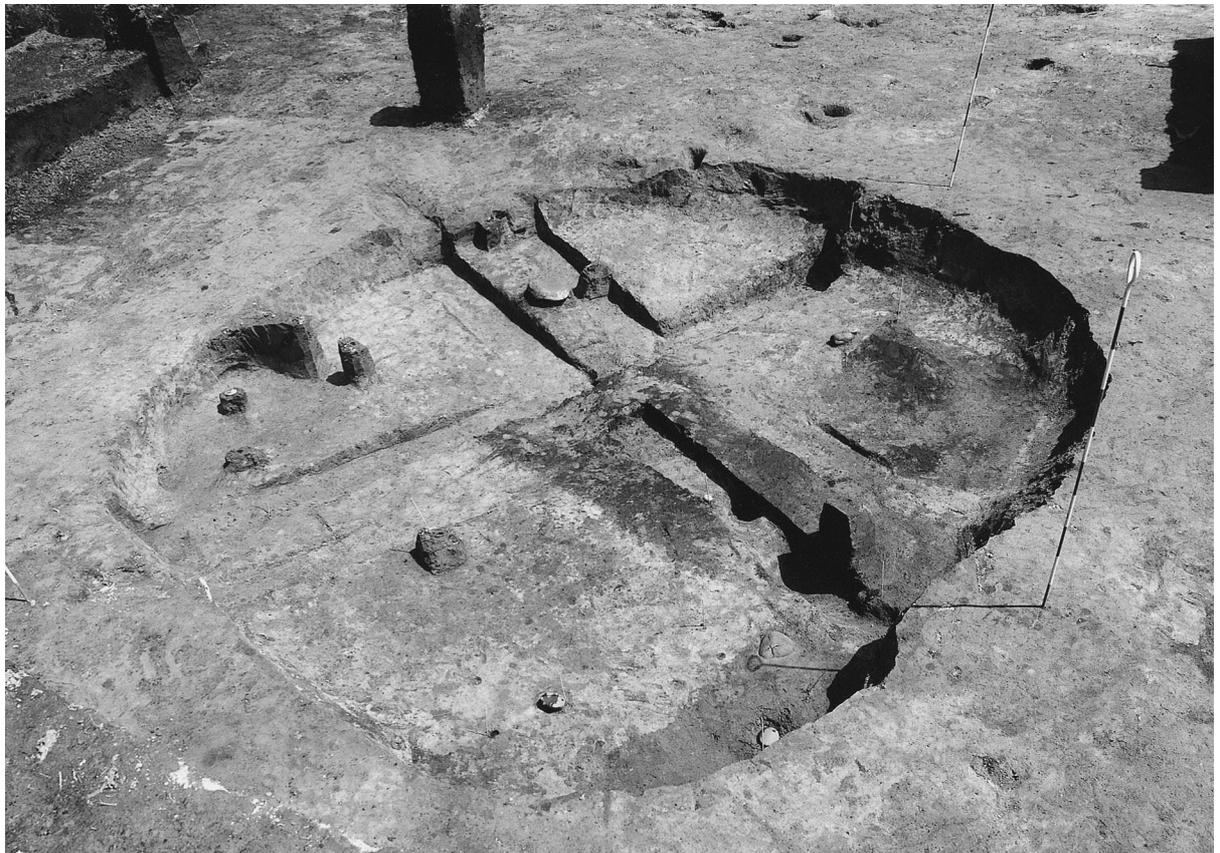
遺物出土点数一覧表

器種名	I群a類 テンネル式古段階	石鏃	石錐	彫器	スクレイパー	Uフレイク	ピエス・エスキュー	石核
遺構	52	2	1	0	4	1	0	0
包含層	868	0	0	1	11	6	1	2
小計	920	2	1	1	15	7	1	2
器種名	フレイク	たたき石	すり石	石錘	台石	礫・礫片	葉莢	合計
遺構	125	1	1	4	2	55	0	248
包含層	107	3	2	17	0	516	1	1,535
小計	232	4	3	21	2	571	1	1,783

東陽1遺跡



調査状況



H-1 遺物出土状況

天寧1遺跡 (M-02-28)

事業名：一般国道44号釧路町釧路外環状道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部

所在地：釧路郡釧路町字別保原野南22線47-4ほか

調査面積：618㎡

発掘期間：平成17年7月12日～平成17年10月31日

調査員：高橋和樹、越田雅司、影浦 覚

遺跡の概要

遺跡は、JR釧路駅から東北東へ約4.5km離れた別保原野内に位置する。北側に広がる台地部分はトンネル式の標識遺跡となった天寧第1地点や、天寧北貝塚、天寧南貝塚などが分布しており、古くから遺跡の存在が知られている場所であったが、現在はそれらをすべて一括し、天寧1遺跡として登録されている。今回の調査範囲はもっとも南側の低位段丘部で、調査範囲の標高は2～6mほどである。基本土層は上からⅠ：表土・攪乱・盛土層、Ⅱ：黒褐色土層、Ⅲ：明灰色～浅黄橙火山灰層、Ⅳ：黒色土層、Ⅴ上：暗灰色土層、Ⅴ中：黒褐色～黒色土層、Ⅴ下：黒色土～暗オリーブ灰色土層、Ⅵ：オリーブ黒色砂壤土層、Ⅶ：暗灰色砂層～緑黒泥炭土層、Ⅷ：緑灰砂層である。Ⅴ層以下は地点によって、色調や砂礫等の構成物の混入具合が様でない。主な遺物包含層はⅣ～Ⅶ層である。Ⅳ層では縄文時代後期後葉～晩期にかけての土器が出土した。Ⅴ～Ⅵ層では縄文時代中期～後期前葉の北筒式土器がⅡ式～Ⅴ式にかけて出土した。Ⅴ層の下位およびⅥ層では中期前葉のモコト式や、前期の可能性が考えられる土器片もわずかに出土している。今年度の調査ではⅦ・Ⅷ層において遺構・遺物を検出していない。Ⅶ層上面をもって調査の最終面とした。

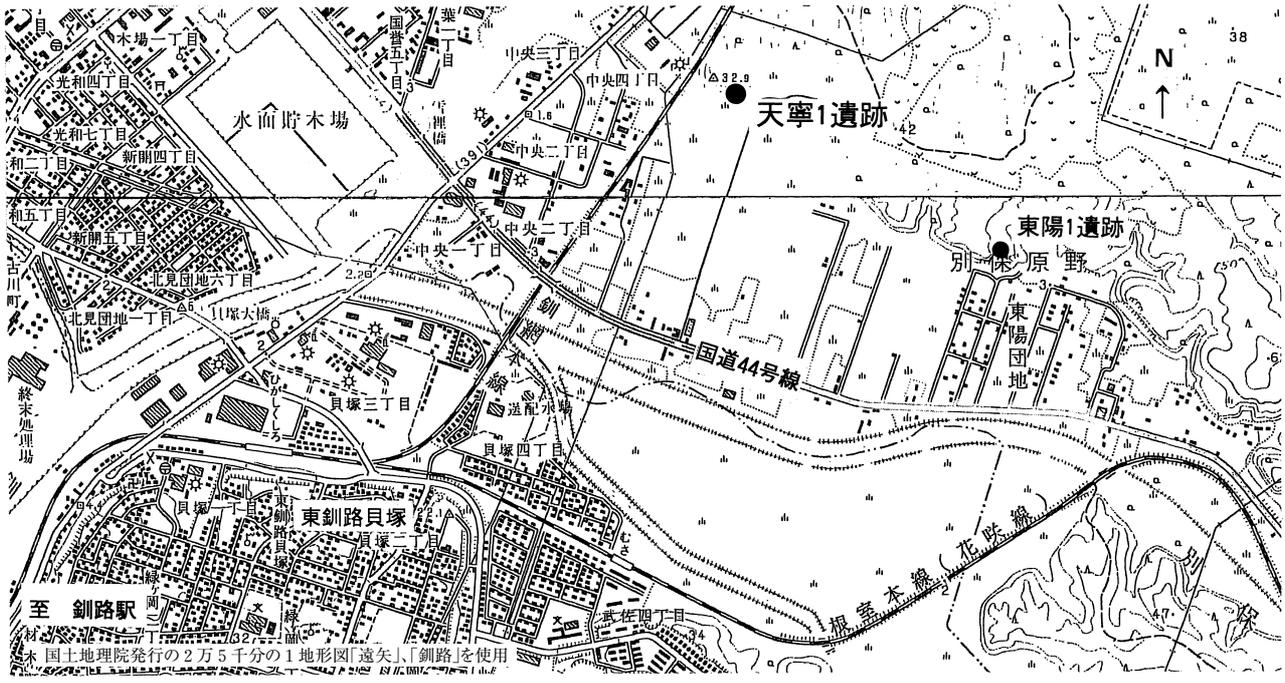
遺構と遺物

検出された遺構は、貝塚1か所、竪穴住居跡1軒、土坑6基、集石28か所、フレイク集中3か所、焼土56か所である。いずれも縄文時代中期後葉～後期前葉にかけての遺構と考えられる。貝塚はオオノガイとアサリが主体で、範囲が約16㎡に及ぶものである。上層は貝類が多いが、下層になるとエゾシカなど陸獣骨、アシカ、オットセイなど海獣骨、カジキマグロ、鮭などの魚骨が多く含まれる。50cm枘のブロックに区切って全てを採取したところ、土嚢袋で851を数える量となった。現段階では未水洗であるが、調査段階においては銚などの骨角器も検出している。土坑は平面形が不定形のものや、楕円形のもの、円形のものなど形状が様々であった。集石は石囲い炉と、被熱した礫が密集したものがある。密集した礫の下に石囲い炉が組み合わさっている例も見られた。石段状に列をなして検出したものもある。また安山岩だけで構成しているものや、砂岩だけで構成しているものなど、石材を意図的に選んでいる例も一部に認められた。焼土は微細な魚骨片が含まれている場合が多い。

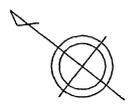
遺物は現在一次整理中であるが36-2Bコンテナ換算で約150箱相当が出土した。土器の中では縄文時代中期～後期前葉の北筒式が全体の9割以上を占め、次いで晩期の土器が出土している。晩期の土器には爪形文や刺突文が施された幣舞式以前と考えられる資料がある。石器はほとんどが剥片石器であった。中でも石槍と刃部が内湾したスクレイパー、Rフレイク・Uフレイクの類が多い。剥片石器の素材については若干の例外を除いて黒曜石であった。掌に収まる程度の黒曜石原石の半面に細かい剥離を加えた特徴的な石核も多く出土している。石斧は全面研磨による撥形のものが多い。

総じて狩猟具と獲物の解体具と見られる遺物が多く、住居跡が1軒しか検出されなかったことなどから、今年度の調査範囲についてはキャンプ・サイトの性格が考えられる。

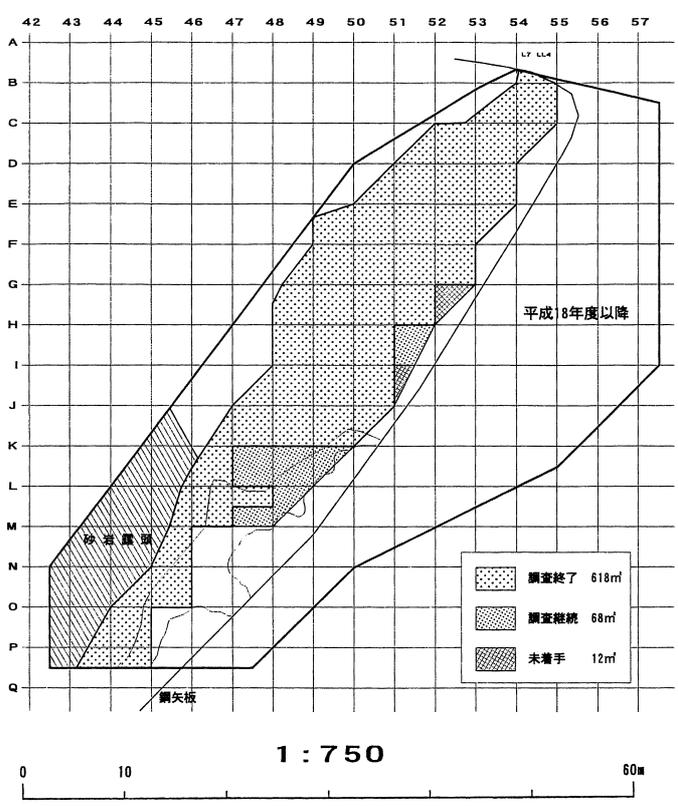
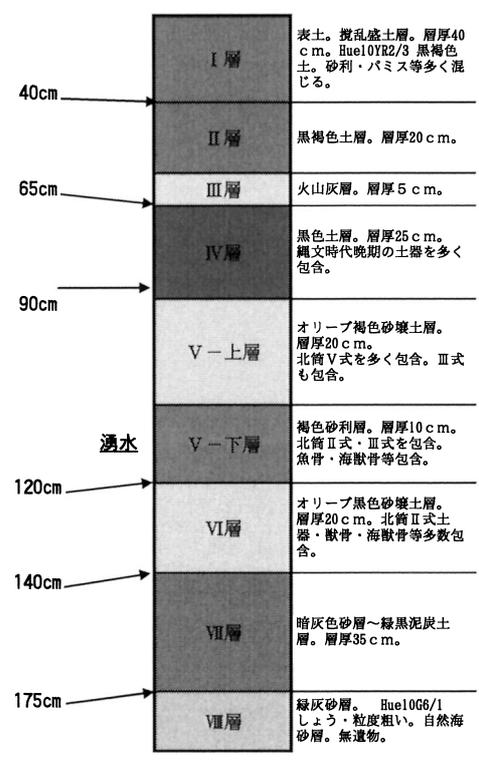
次年度は、さらに低地部分の調査を行う予定である。



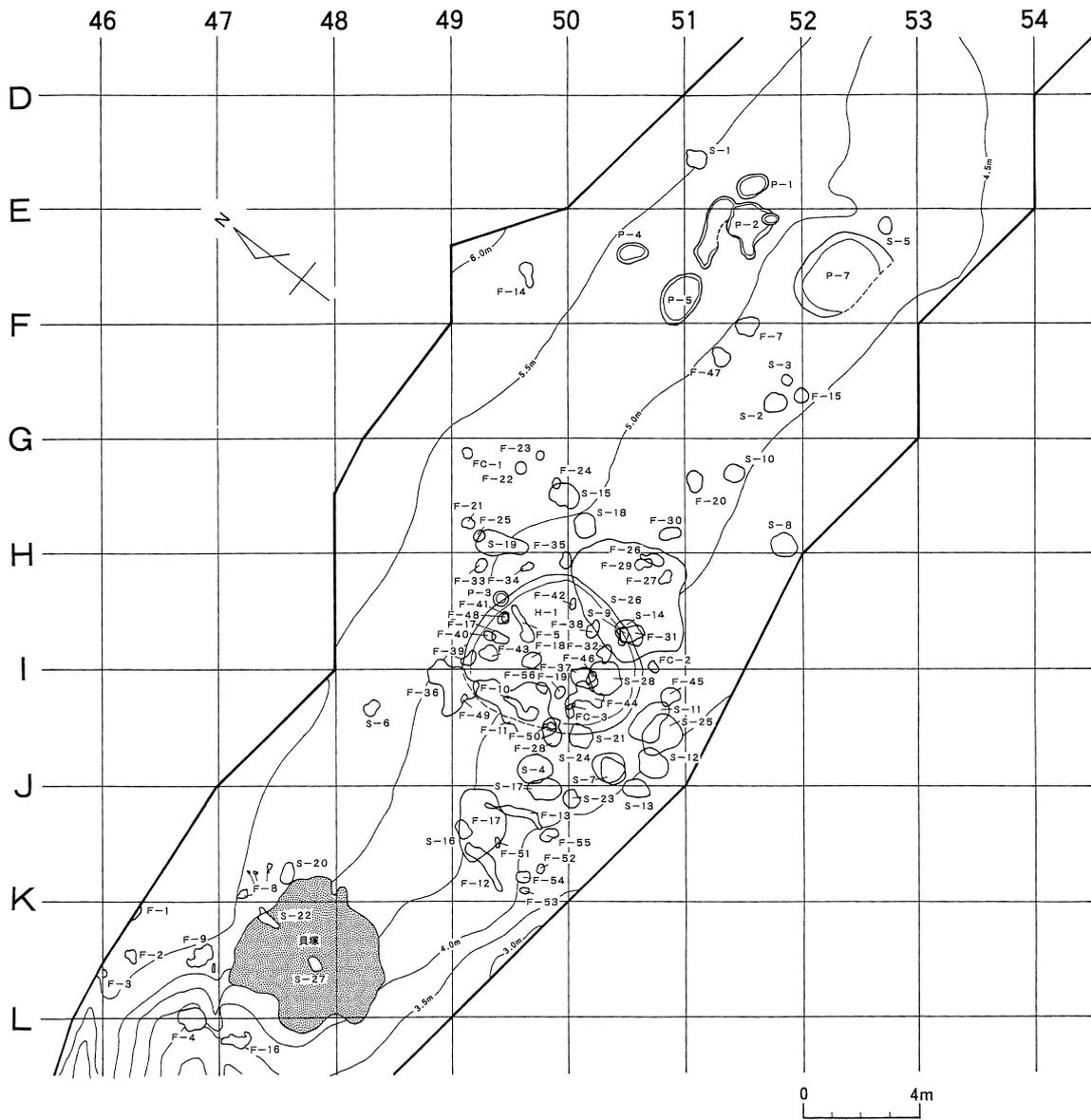
遺跡位置図



地表面からの深さ 基本土層柱状模式図 (J 48区)



今年度調査範囲図



遺構分布図（等高線は最終面地形）

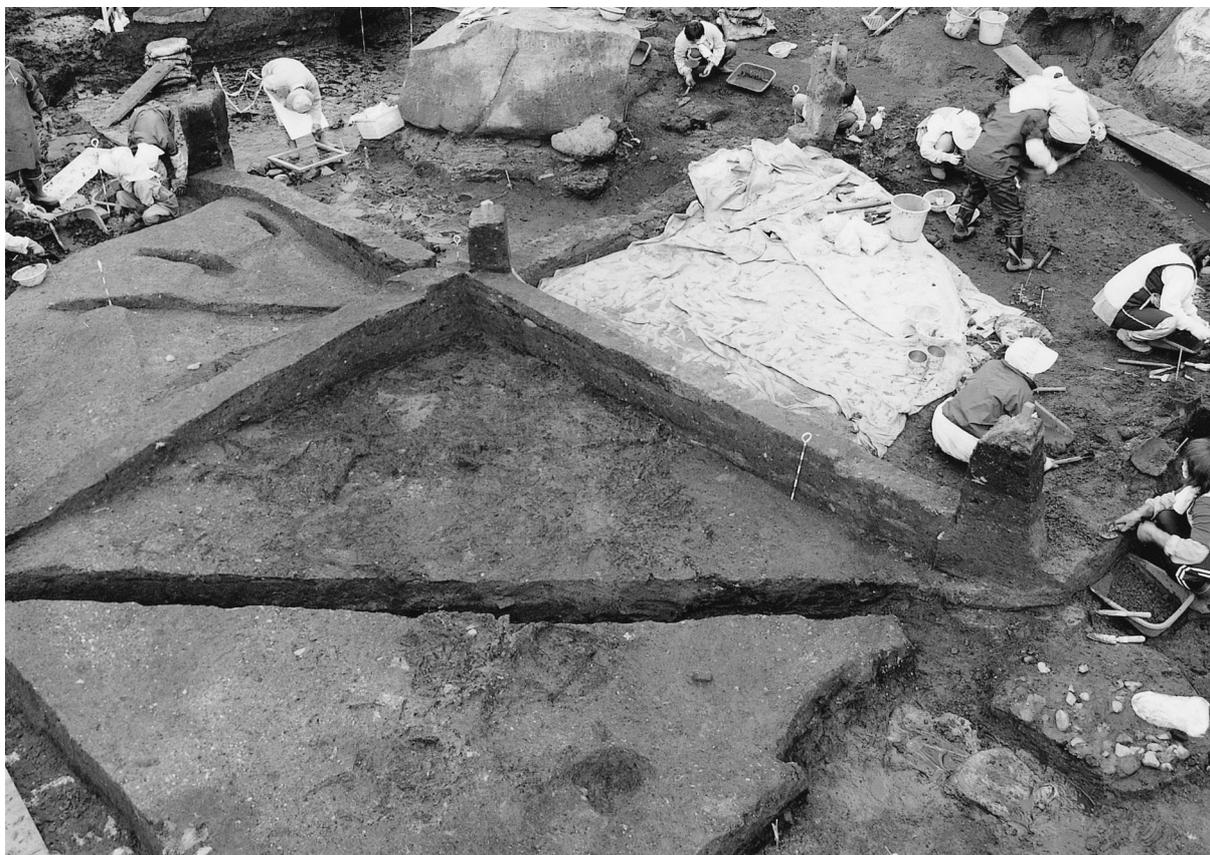
天寧1遺跡 遺構一覧表

貝塚	竪穴住居跡 (H)	土坑 (P)	集石 (S)	焼土 (F)	フレイク集中 (FC)
1	1	6	28	56	3

天寧1遺跡



調査状況



H-1 調査状況



貝塚調査状況



貝塚土層断面

しらたき
白滝遺跡群

事業名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

整理期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日

調査員：鈴木宏行、直江康雄

継続整理遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物点数(点)
服部台2遺跡(I-20-13)	紋別郡遠軽町字奥白滝18-3	797,516
奥白滝1遺跡(I-20-50)※	紋別郡遠軽町字上白滝183-2、183-5	182,922
上白滝8遺跡(I-20-91)※※	紋別郡遠軽町字上白滝181-4、182-2、182-3	647,130
白滝8遺跡(I-20-58)	紋別郡遠軽町字白滝146-1、146-2	4,030
白滝18遺跡(I-20-92)	紋別郡遠軽町字白滝145、139-1	47,762
白滝3遺跡(I-20-36)	紋別郡遠軽町字白滝106他	41,277
旧白滝5遺跡(I-20-28)	紋別郡遠軽町字旧白滝417	261,483
合	計	1,982,120

※ 平成12年度調査分 ※※ 西地区分

遺跡群の概要

遠軽町白滝地区は、北海道の屋根といわれる大雪山系の東北山麓にあり、市街地の北西約6kmには国内有数の黒曜石産出地として知られる赤石山がある。赤石山の南側を流れる湧別川とその支流の支湧別川の河岸段丘上には、旧石器時代を中心とした遺跡が多数所在し、それらは「白滝遺跡群」と総称されている。特に赤石山に通じる八号沢川、十勝石沢川、幌加湧別川と湧別川との3か所の合流点付近には、大規模な遺跡が集中している。いずれも白滝産の黒曜石を背景とし、多量の石器製作を行う原産地遺跡として位置付けられるが、遺跡の立地や石器群によってそれぞれ特徴を異にする。当センターでは平成7年度から17遺跡、約99,000㎡の調査を行い、約463万点、約10tの遺物が出土している。

整理の概要

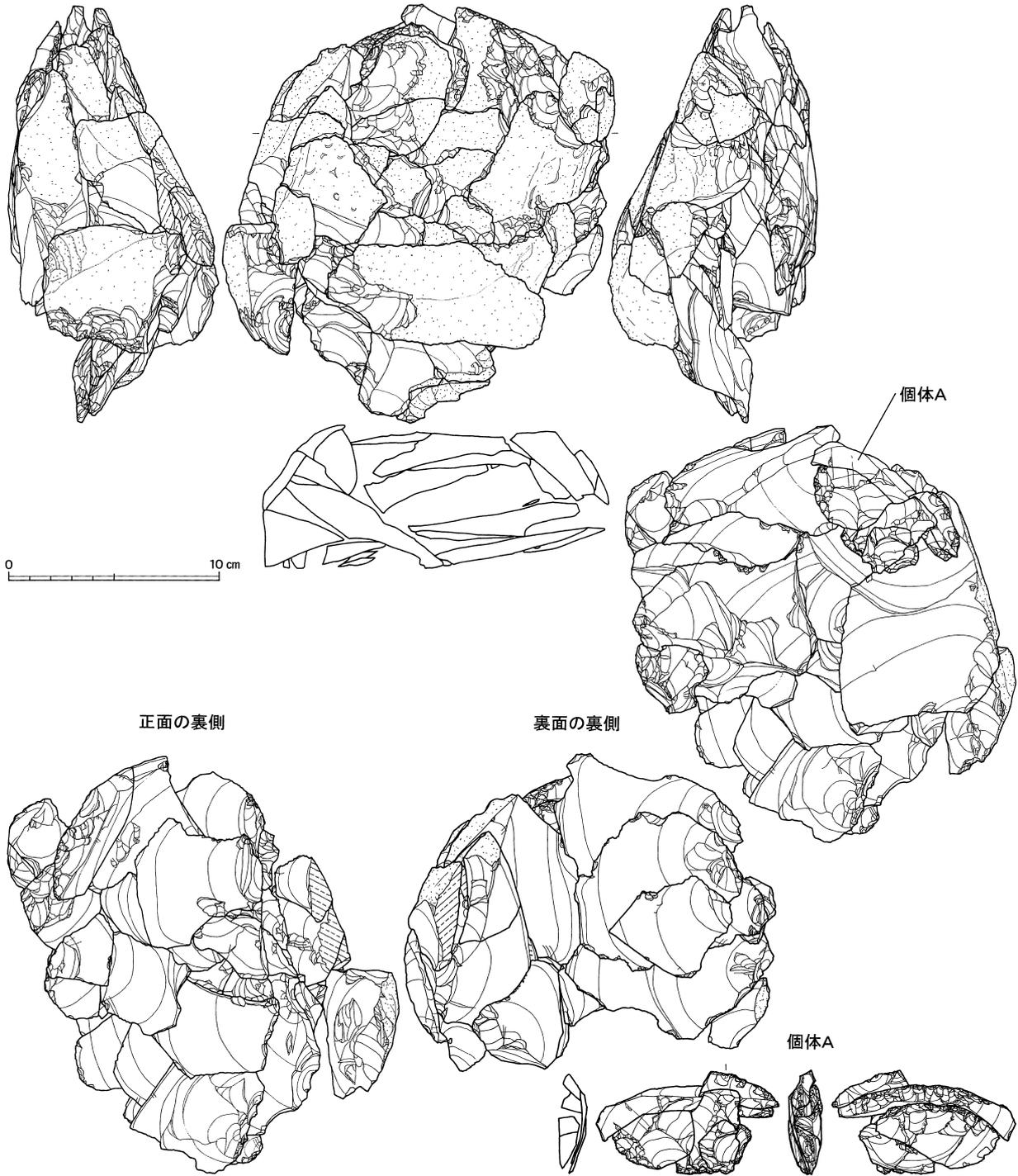
今年度は7遺跡の二次整理を行った。それぞれ報告書刊行順に作業が異なる。上白滝8遺跡の西地区は報告書『白滝遺跡群VI』の編集作業を行い、服部台2・奥白滝1・白滝3・白滝8・白滝18遺跡については図版作成作業を行った。旧白滝5遺跡は高位部を図化・データ整理作業を中心に行い、中位部については接合作業を行った。

今年度主に図化作業を行った旧白滝5遺跡の高位部は、赤石山に通じる幌加湧別川と湧別川の合流点から約400m遡った幌加湧別川の左岸に位置している。全体で約26万点の遺物が出土した。高位部では細石刃、細石刃核、削片、舟底形石器、尖頭器、両面調整石器、彫器、削器、錐形石器、台形石器、石刃、石刃核、石核等が出土し、複数の石器群が確認されている。ここでは、接合資料によって確認できた高位部の細石刃剥離技術についての特徴を述べる。

亜角礫を遺跡内に持ち込み、両面調整石器を製作するものが主体的である。遺跡内で出土する細石刃核の素材は、上記の両面調整石器を作製する際の剥片が利用されている。石核・縦長剥片を素材とするものは少ない。これらの剥片素材の細石刃核は、周縁のみの加工、片面加工若しくは半両面加工が施され、細石刃核母型へと加工されている。その後削片が作出されるが、基本的に一方向から施され、途中、打面からの側面調整や下縁からの調整が一般的に行われている。細石刃剥離は削片作出打面側から施され、打面再生を行うことなく多量の細石刃が剥離される傾向がある。細石刃自体の幅は狭いものが主体

で、末端のねじれはあまり見られない。

上記の素材を剥離した全体の接合資料が数多く復元できた。製作剥離の大きな特徴は、初期段階で急角度の剥離が行われ、そこで得られた垂直に近い面を打面として平坦剥離が開始されている。両面調整石器自体は遺跡外に搬出されたものが多く、不明瞭である。しかし最終的な空隙の大きさから想定される本体の特徴は、①やや幅広であり、②両端があまり尖らず、丸みを帯び、③厚さが薄手と厚手の2種に分かれる。これらのことから空隙部の両面調整石器は、尖頭器若しくは細石刃核の母型となったと考えられる。今後はこれらの特徴を踏まえ、全道的に広がる多様な細石刃石器群中に本石器群を位置付ける必要がある。



旧白滝5遺跡 両面調整石器関連の接合資料

もりかわ
森川3遺跡 (B-15-26) ・ さんじろうがわうがん
三次郎川右岸遺跡 (B-15-35)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：東日本高速道路株式会社北海道支社（旧日本道路公団北海道支社）

所在地：茅部郡森町字森川町317-18ほか（森川3）、字石倉町610-24ほか（三次郎川右岸）

整理期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日（二次整理のみ）

調査員：（森川3）熊谷仁志、谷島由貴（三次郎川右岸）末光正卓、大泰司統

整理の概要

森川3遺跡

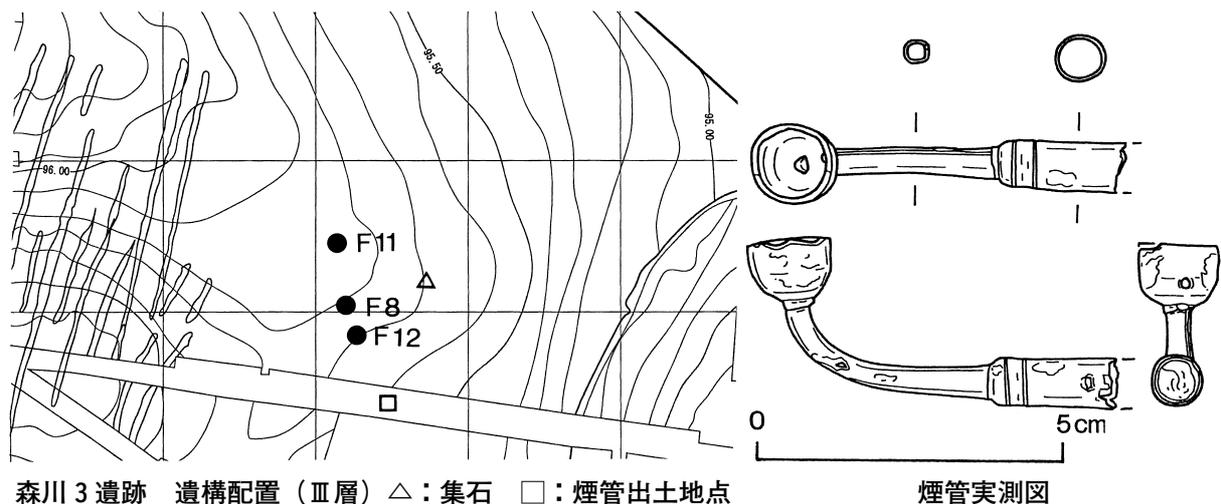
森川3遺跡は平成14・15・16年度に調査し、平成14・15年度分についてはすでに報告している（北埋調報222）。今年度は、平成16年度調査分の二次整理作業を実施している。二次整理作業中に1640年降下の駒ヶ岳d火山灰層（Ⅱ層：層厚約170cm）の下位のⅢ層から検出された焼土（F-8）の残渣を精査した。その結果、多くの焼骨とともに鍛造剥片が300点ほど検出され、F-8が鍛冶関連遺構であることがわかった。また、F-8の周辺のⅢ層中からは畑跡が検出されており、同層周辺の出土遺物の再点検の結果、周囲からも鉄製品や鍛冶との関連想定させる集石が出土している。集石は10cmほどの礫5個がまとまって出土した小規模なもので、部分的に被熱した痕跡が認められるものもあった。金属製品には煙管（キセル）や鉄製の楔（クサビ）と思われるものなどがあり、煙管は、その形態から判断して比較的古い段階のものと考えられる。

焼土F-8について次のような年代測定値が得られている。

補正年代 Age (yrBP) : 350 ± 30 (IAAA-51436)

三次郎川右岸遺跡

三次郎川右岸遺跡は平成15・16年度に調査し、二次整理は平成16年度から継続して実施している。縄文時代中期から後期前葉の住居跡に伴う土器が復元されている。また、続縄文時代の遺物集中地区から多くの土器・石器とともにシカを主体とした焼骨・炭化種子等の自然遺物も検出され、同期の生活を知る貴重な資料も得られている。



森川3遺跡 遺構配置（Ⅲ層）△：集石 □：煙管出土地点

煙管実測図



F-8 検出状況



F-8 断面



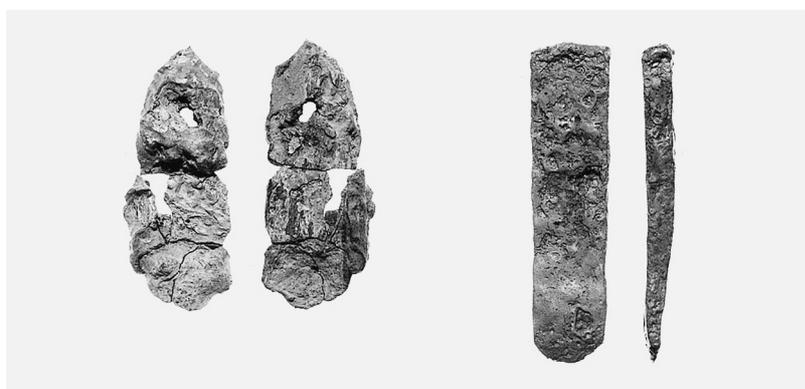
F-8 周辺



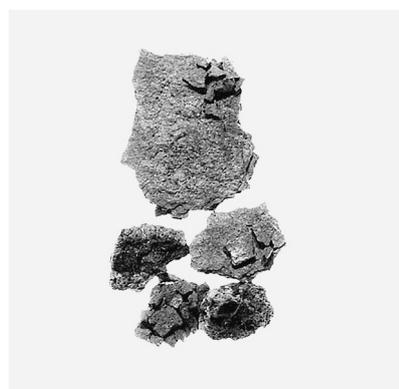
集石検出状況



鉄製品出土状況



F-8 周辺出土の鉄製品



F-8 出土の鍛造剥片

柏木川4遺跡 (A-04-21)

事業名：柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財調査

委託者：北海道石狩支庁札幌土木現業所

所在地：恵庭市柏木町610、612ほか

調査面積：14,140㎡

発掘期間：平成17年5月9日～10月28日

調査員：村田 大 (A地区担当)、立田 理 (B地区担当)、吉田裕吏洋 (C地区担当)

遺跡の概要

遺跡は、恵庭市街地から北西に2.5km、柏木川の右岸に位置する。調査区は標高約45mの上位段丘と標高約42mの下位段丘および旧流路を含む低地部からなる。以前は、水田や畑地に利用されていた。試掘調査の結果から、調査区中央の遺物包含層が良好に残存する部分を通常発掘区のA地区、低地部を重機併用の遺構確認の調査区および工事立会的調査区のB地区。耕作により遺物包含層が削平されている南側を遺構確認区のC地区として調査を行った。

今年度調査区に隣接する西側は、昨年度に8,470㎡を調査し、住居跡1軒、土壙78基等の遺構を検出、遺物は7,096点出土した。調査報告書『恵庭市 柏木川4遺跡・柏木川13遺跡(2)』(北埋調報211)が刊行されている。

基本土層は、I層：表土、II層：樽前a降下軽石層(Ta-a)、III層：黒色土、IV層：暗褐色土、漸移層、V層：恵庭a降下軽石層(En-a)である。遺物包含層はIII・IV層で、遺物の大半はIII層から出土した。

遺構と遺物

遺跡の主な時期は縄文時代晩期と擦文文化期で、低地部では縄文時代後期後葉の遺物の出土が多い。

A地区からは住居跡、土壙、焼土等が検出された。縄文時代のものは、前期後半の竪穴住居跡が1軒検出された。土壙は大半が、晩期後葉に属するもので、円形や楕円形のものがある。擦文文化期のものは、竪穴住居跡が2軒、いずれも焼失住居で支柱穴が竪穴の外にあるものであった。時期は出土した遺物から8世紀中頃である。

B地区からは上位段丘の縁辺部から、縄文時代後期後葉の頃と思われる焼土が検出されている。

C地区からは縄文時代の土壙、焼土等が検出された。

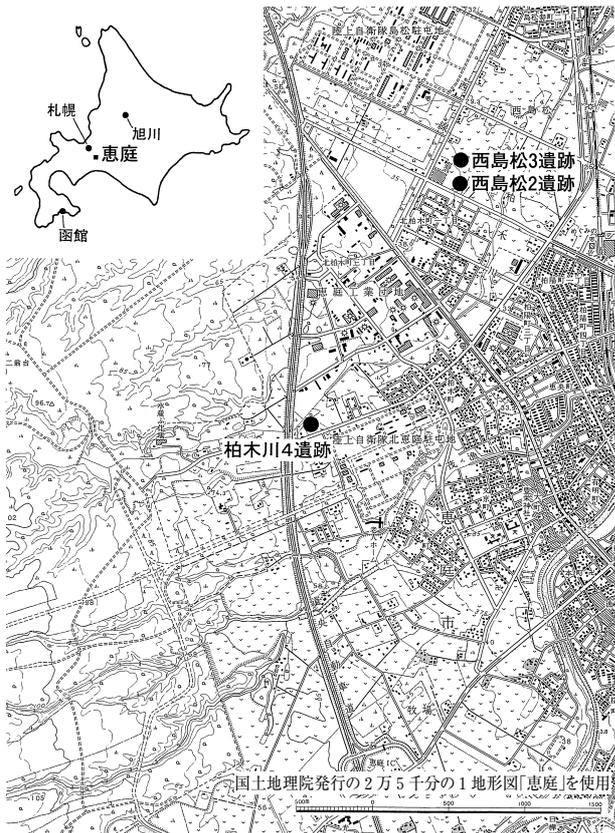
出土した遺物は、約55,000点で、土器等約45,000点、石器等約10,000点である。土器は縄文時代晩期後葉のものが大半を占める。B地区では後期後葉の堂林式が、C地区では中期後半のものが多く見られる。石器は剥片石器が多いが、C地区では石斧の出土が目立つ。B地区からは近・現代のものと思われる木製品が出土している。

遺物一覧 (仮集計)

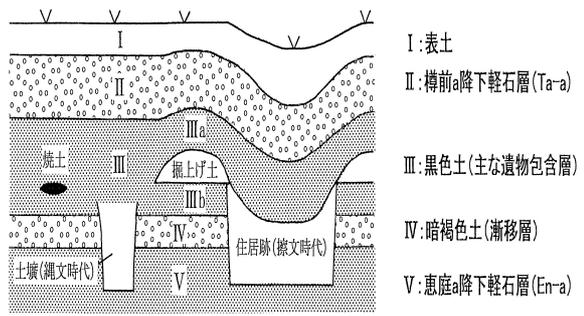
土器等	包含層		遺構 A・C地区	計
	A地区	C地区		
縄文早期	24	0	0	24
縄文前期	54	1,078	83	1,215
縄文中期	702	1,022	276	2,000
縄文後期	121	0	17	138
縄文晩期	25,904	92	6,206	32,202
統縄文	5	0	2	7
擦文	582	31	315	928
不明	6		1	7
土製品	2	0	1	3
計	27,400	2,223	6,901	36,524

石器等・ 金属製品	包含層		遺構 A・C地区	計
	A地区	C地区		
石器	671	125	199	995
フレイク	3,397	775	915	5,087
礫	1,629	1,029	235	2,893
石製品	5	0	1	6
金属製品	3	0	0	3
計	5,705	1,929	1,350	8,984

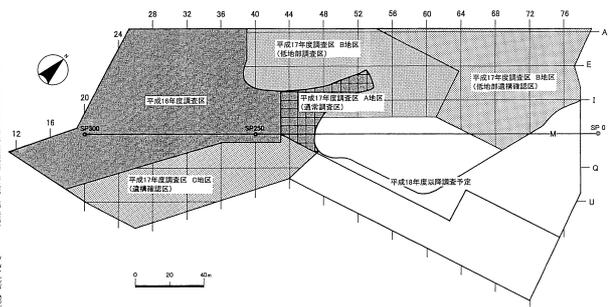
B地区 土器・石器・金属製品・木製品等 約10,000点



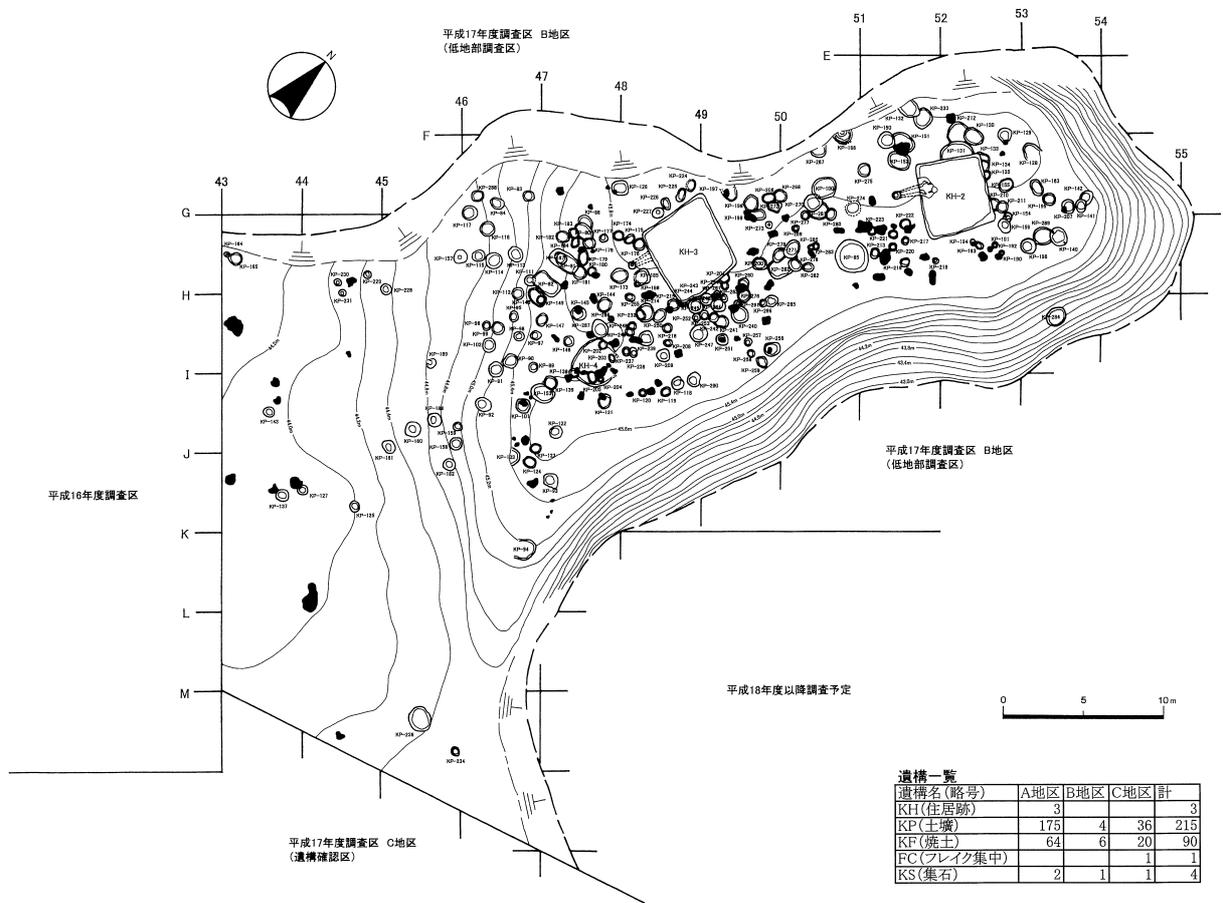
遺跡の位置



基本土層模式図



調査区設定図



A地区 遺構位置図

遺構一覧

遺構名(略号)	A地区	B地区	C地区	計
KH(住居跡)	3			3
KP(土塚)	175	4	36	215
KF(洗土)	64	6	20	90
FC(フレイク集中)			1	1
KS(集石)	2	1	1	4

柏木川 4 遺跡



KH-2 (奥)・3 (手前) 調査状況



調査状況



KP-85調査状況

にししまつ 西島松 2 遺跡 (A-04-35) ・にししまつ 西島松 3 遺跡 (A-04-36)

事業名：柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者：北海道石狩支庁札幌土木現業所
所在地：恵庭市西島松501-1、502-1、507-1、530-2～7、537ほか
調査面積：7,205㎡（西島松2）、2,800㎡（西島松3）
発掘期間：平成17年5月8日～10月31日
整理期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日
調査員：佐藤和雄、土肥研晶、吉田裕吏洋

遺跡の概要

遺跡は、恵庭市の西方、JR恵み野駅から北西約700mに位置する。遺跡は柏木川の左岸、柏木川とその支流であるキトウシュメンナイ川に挟まれた標高約28mの沖積低地上に立地する。調査は西島松3遺跡が3か年目、西島松2遺跡は初年度にあたる。工事区域内には北側から西島松5遺跡、西島松3遺跡、西島松2遺跡の順に3つの遺跡が並び、西島松5遺跡は昨年度、西島松3遺跡は今年度で現地調査を終了した。西島松2遺跡と西島松3遺跡の境は本来85ラインであったが、検出された土坑群の広がりから75m北側の70ラインに変更し、遺構番号もその線から南側は1番から付した。調査区は全般に攪乱をうけるが、西島松3遺跡側は造成により特に深く削平され、見つかった遺構の多くは、道跡とその周辺からであった。表土を除去すると、調査区西側から急激に落ち込む崖地形が現れ、低い調査区は河川堆積層であることがわかった。低地の土層はⅡ層、川砂層、川砂利層、Ⅳ層（支筋軽石流の2次堆積）の順に重なり、上層の黒色土中には縄文時代の焼土などがみられ、川砂層は無遺物層、川砂利層には、縄文時代前期から晩期後葉の遺物が多数含まれていた。

基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土であるが、残りの良いⅡ層は、さらに次の3層に分けることができた。

Ⅱa層：黒色土層で縄文時代以降の包含層

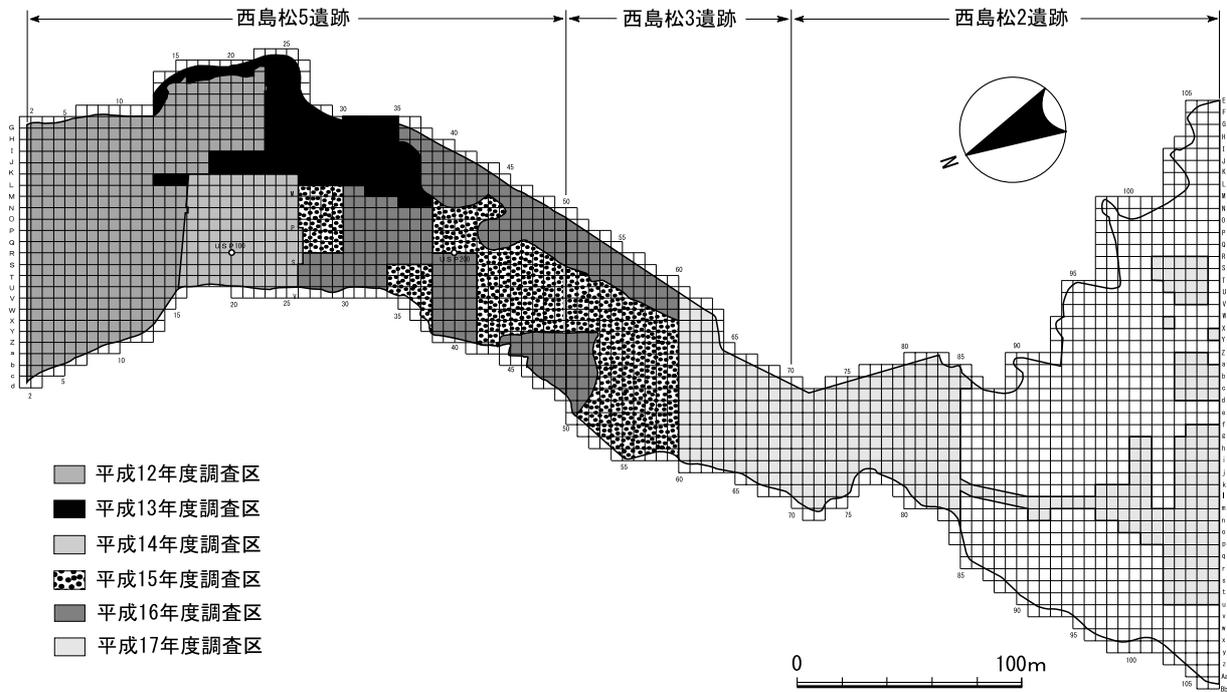
Ⅱb層：樽前c降下軽石層が混じるとおもわれる暗褐色土層で、縄文時代晩期後葉の包含層

Ⅱc層：黒褐色土層で、縄文時代晩期以前の包含層

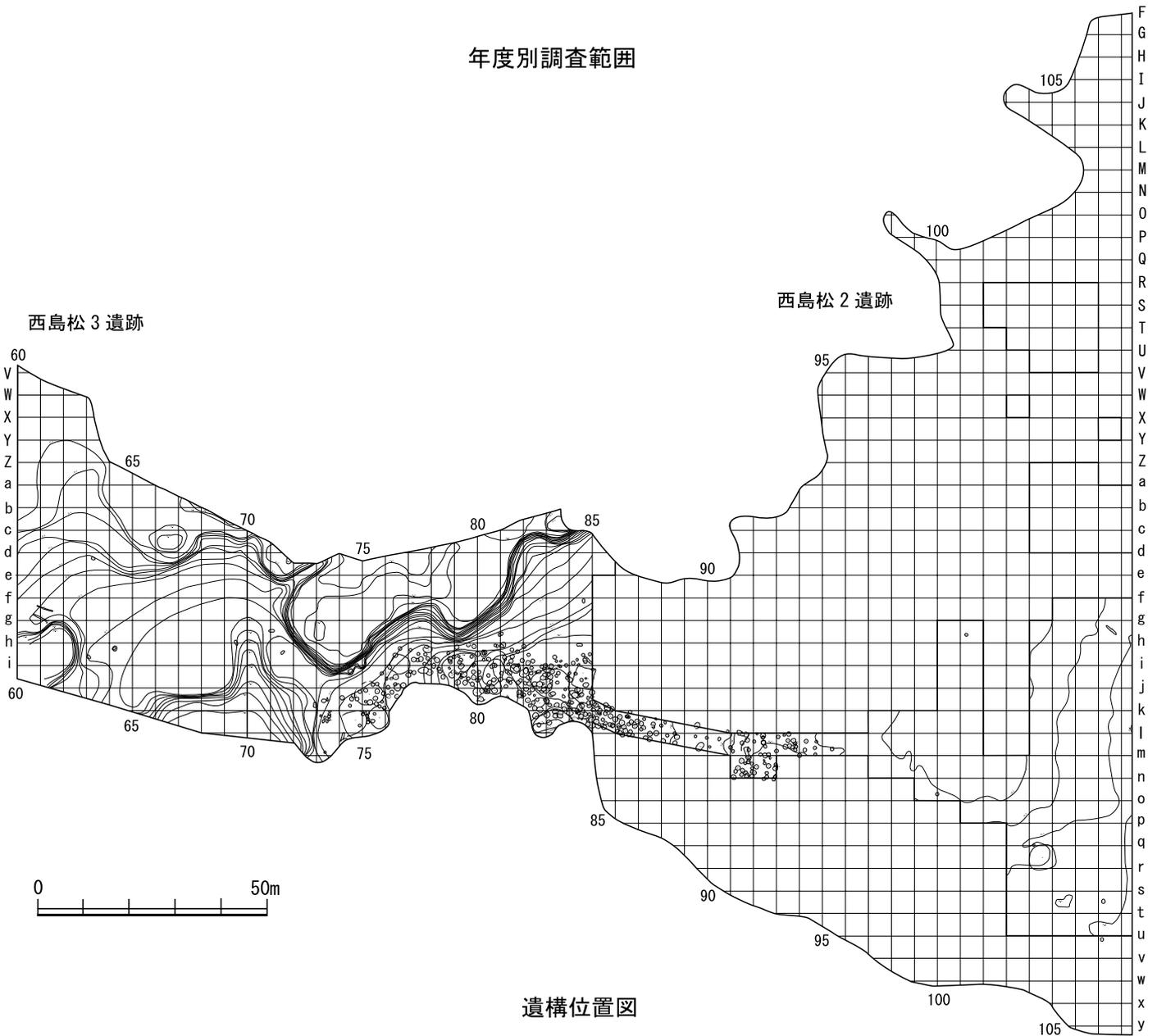
調査区内には部分的に樽前a降下軽石層がⅡ層上に残存していた。また、土坑中のⅡa層中には白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm、10世紀中葉降灰）、Ⅱb層下には樽前c降下軽石層の堆積がみられるものもあった。

遺構と遺物

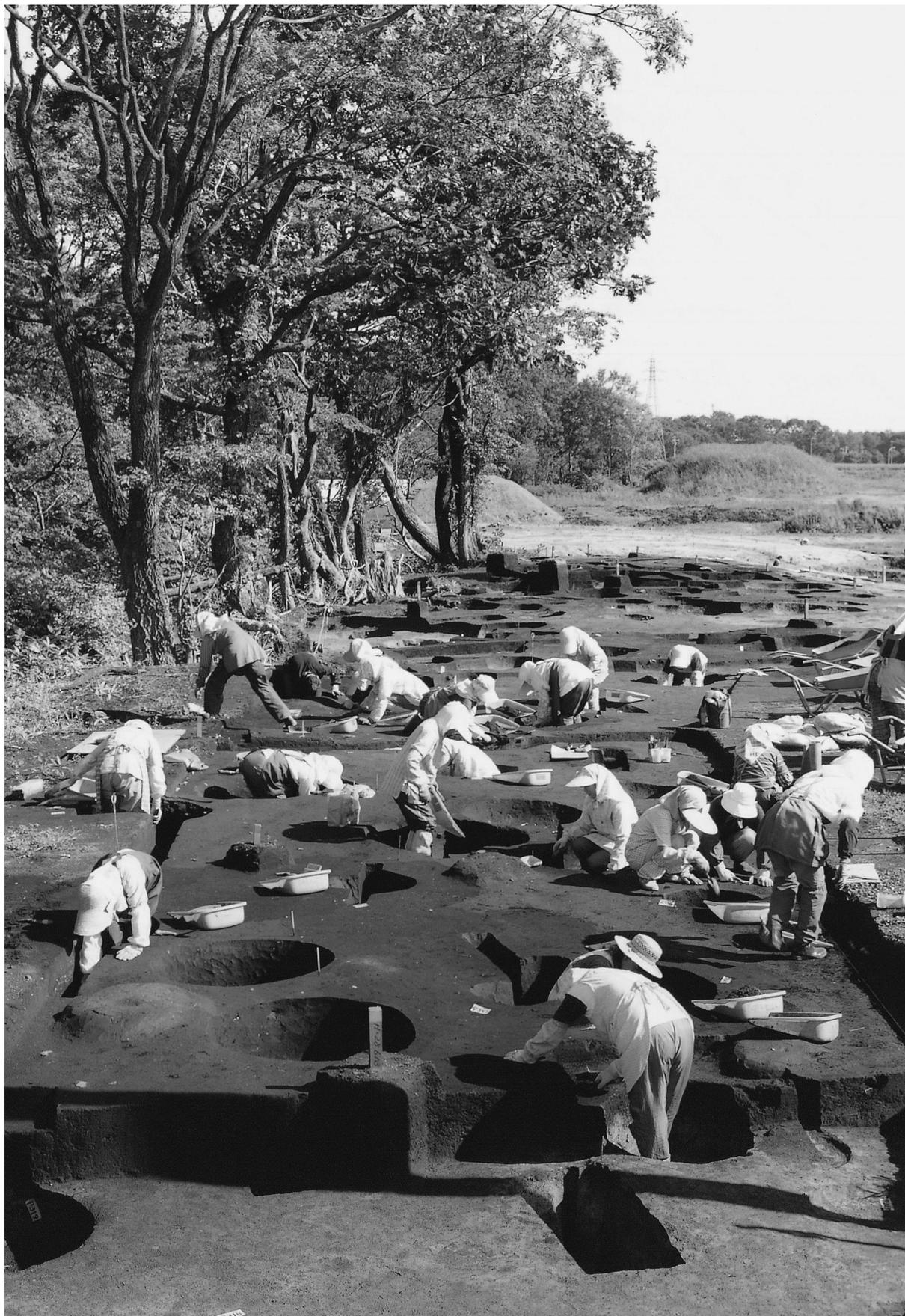
今年度調査した遺構は、西島松2遺跡で、住居跡16軒、土坑（土坑墓を含む）441基、Tピット4基、焼土143か所、集石遺構1か所、小ピット61か所。西島松3遺跡では土坑4基、Tピット2基、小ピット4か所である。検出された住居跡のうち、擦文文化期のものが1軒、縄文時代後期前葉のものが1軒、早期後葉のものが1軒で、残りの住居は縄文時代中期ころのものとみられる。土坑の多くは縄文時代晩期後葉と推測され、縄文時代の住居跡を掘りぬいているものも多い。土坑の平面形には円形のものと同長円形のものがあり、重複関係から、後者のほうが新しいと推測される。副葬された土器は、Ta-c層より上層で出土する資料で、なかには縄文時代晩期終末期から縄文の初頭期に属すると考えられる資料も出土している。また、近世アイヌ墓が1基検出され、太刀、刀子、マレックなどが出土している。低地に落ち込む斜面の包含層からは、縄文時代前期の静内中野式相当の捨て場が検出され、土器、石器に混じり漆製品も見つかっている。



年度別調査範囲



遺構位置図



調査状況



西島松 2 遺跡 P 175人骨検出状況



西島松 2 遺跡 P 262遺物出土状況



西島松 3 遺跡 低地部遺物出土状況

3 現地研修会の記録

9月8日(木)、9日(金)に、上磯町の館野4遺跡、矢不來7遺跡を主会場にして研修会を計画していたが、台風14号の接近による暴風雨が予想されたので中止した。

今回は、「上磯町の文化財」と「市町村合併と埋蔵文化財行政」の講演を準備し、当埋蔵文化財センターが調査中の遺跡のみならず、上磯町教育委員会、函館市教育委員会が調査中の遺跡なども見学予定であった。前年の台風18号による暴風雨も思い起こされて、今年の研修会は中止せざるを得ませんでした。講師として準備していただいた森靖裕、長谷部一弘の両氏には、記して感謝の念をあらわします。ここに研修会(計画)の概要を記しておく。

8日(木)、函館市教育委員会が調査中の五稜郭跡、見学。

市立函館博物館五稜郭分館の見学。

講演会：「上磯町の文化財」講師 上磯町教育委員会 森 靖裕氏

「市町村合併と埋蔵文化財行政」講師 函館市教育委員会 長谷部一弘氏

9日(金)、上磯町内の遺跡巡検。館野4遺跡。茂別館跡。矢不來7遺跡。

さらに、長谷部一弘氏が準備した多種多様な文化財を網羅した19ページにもわたる資料のうちから講演(予定)の骨格を成す項目、数量部分を再録しておく。

市町村合併と埋蔵文化財行政について

函館市教育委員会 文化財課 長谷部 一弘

- 市町村の合併 函館市、戸井町、恵山町、南茅部町、楸法華村
平成16年12月1日合併(面積677.79平方キロ、人口298,084人)
- 函館市の文化財 122件(国13、国選定1、国登録7、道19、市82)
函館79件、戸井1件、恵山10件、南茅部32件、楸法華0件
- 函館市の埋蔵文化財 316件
 - 包蔵地 函館142件(347.86平方キロ) 南茅部89件(159.56平方キロ)
 - 戸井18件(53.27平方キロ) 恵山57件(95.30平方キロ)
 - 楸法華10件(25.16平方キロ)
 - 収蔵数 約1,000万点(函館500万点、南茅部400万点、その他100万点)
 - 北海道埋蔵文化財センターの調査
函館空港遺跡群、石川1遺跡、桔梗2遺跡等
- 埋蔵文化財の活用
 - 市立函館博物館の展示(常設展、企画展)コレクション(馬場約1,100件、見玉2,700件、能登川)
 - 函館市大船遺跡埋蔵文化財展示館(文化財課所管) 函館市戸井郷土館(戸井貝塚等)
 - 函館市恵山郷土博物館(日ノ浜、恵山貝塚等) 各教育事務所の対応
 - 空港ビル展示コーナーの開設(2005年6月2日)(北の縄文文化回廊)
 - NPO法人函館市埋蔵文化財事業団の発足(2005年2月22日)
- 埋蔵文化財の史跡整備、調査等
 - 史跡大船遺跡
 - 垣ノ島遺跡(国道278号)

4 協力活動及び研修

(1) 協力活動

ア 発掘現場見学

- * 共和町リヤムナイ3・上リヤムナイ遺跡見学（共和町文化財審議委員） 5月26日
- * 恵庭市西島松3遺跡、柏木川4遺跡見学
（恵庭市カリンバの会『歩いて巡る恵庭の遺跡』） 5月28日
- * 早来町大町2遺跡見学（早来町教育委員会親子発掘体験事業） 6月25日
- * 恵庭市西島松2・3遺跡、柏木川4遺跡見学
（恵庭市郷土資料館遺跡見学会） 7月2日
- * 千歳市キウス9遺跡見学・体験発掘
（千歳市立千歳第二小学校6年生） 7月7日
- * 江別市対雁2遺跡見学（日本文化財科学会エクスカージョン） 7月11日
- * 江別市対雁2遺跡見学
（大阪府立弥生文化博物館「北海道史跡と考古の旅」） 7月12日
- * 江別市対雁2遺跡見学
（NHK文化センター新さっぽろ教室『北の遺跡を探る』） 7月14日
- * 上磯町矢不來6遺跡見学・体験発掘
（七飯町歴史館ジュニア探検クラブ） 7月27日
- * 上磯町矢不來11遺跡見学
（市立函館博物館平成17年度博物館講座「遺跡めぐり」） 8月11日
- * 江別市対雁2遺跡見学（北海道考古学会遺跡見学会） 8月27日
- * 共和町リヤムナイ3遺跡見学（共和町東陽小学校6年生） 9月6日
- * 共和町リヤムナイ3遺跡見学
（平成17年度共和町教育研究会実技講習会（研修視察）） 9月20日
- * 江別市対雁2遺跡見学（広島大学大学院考古学研究室） 10月17日
- * 上磯町矢不來7遺跡見学（南北海道生コンクリート協同組合） 10月18日

イ 委員会・講演会

- * 大湯ストーンサークル館事業に係わる職員派遣（鹿角市）
《派遣》 富永 1月15日～16日
- * 「楽しい子ども考古学教室」講師派遣（北広島市）
《講師》 藤井 1月16日
- * 史跡最寄貝塚保存整備委員会（網走市）
《委員》 千葉 1月27日
- * 北海道測量事業協同組合通常総会記念講演
《講師》 越田（賢） 2月25日
- * 科学研究費補助金「中世日本列島北部－サハリンにおける民族形成過程の解明－市場経済圏拡大の観点から」
《研究協力者》 越田（賢） 2月26日～28日

- *イオル再生等アイヌ文化伝承方策基礎調査委員会（札幌市）
《委員》千葉 2月28日
- *史跡標津遺跡群天然記念物標津湿原整備委員会（群馬県）
《委員》千葉 3月1日～2日
- *野付半島遺跡群調査事業実施に伴う職員派遣及び出土遺物の分析（別海町）
《派遣》田口 3月14日～17日
- *日本文化財科学会第22回大会実行委員
《委員》千葉・田口・鈴木・立田 3月15日～7月11日
- *「環日本海文化に関する人類学的研究：その環境、資源、交易をめぐって」特別講師
《講師》越田（賢） 3月18日～21日
- *「千歳ふるさと探訪－埋蔵文化財と千歳－」
《講師》西田 3月19日
- *科学研究費補助金「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」
《研究協力者》西田 平成17年4月1日～平成18年3月31日
- *平成17年度北海道文化財・埋蔵文化財担当者会議（札幌市）
《派遣》田中 4月27日～28日
- *東京大学北海道演習林で確認された活断層の剥ぎ取り指導（富良野市）
《派遣》田口 6月2日～4日
- *北海道立北方民族博物館特別展用標本作成協力
《協力者》田口 6月13日～30日
- *ワクワク公民館まつりにおける「勾玉づくり」指導（北広島市）
《派遣》藤井 7月3日
- *野付半島遺跡群調査事業実施に伴う職員派遣及び出土遺物の分析（別海町）
《派遣》田口 7月20日～22日
- *北海道森町鷺の木5遺跡の地下レーダー調査に係わる協力について
《派遣》田中・田口 7月25日～30日
- *斜里町来運1遺跡発掘調査に伴う職員派遣（斜里町）
《派遣》田口 8月16日～19日
- *「噴火湾岸域における後氷期の自然環境の変動と人類適応」に関する貝層剥離標本作成指導（伊達市）
《派遣》田口 9月3日～4日
- *史跡最寄貝塚保存整備委員会（網走市）
《委員》千葉 9月15日
- *史跡標津遺跡群天然記念物標津湿原整備委員会（標津町）
《委員》千葉 9月17日
- *宮古市内遺跡発掘調査事業に伴う指導依頼（宮古市）
《派遣》福井 10月29日～30日
- *第19回東北日本の旧石器文化を語る会（札幌市）
《発表者》鈴木（宏）・直江 11月26日～27日
- *第26回南北北海道考古学情報交換会in厚沢部（厚沢部町）
《発表者》佐川・宗像・鎌田・福井 12月4日

- *北海道考古学会
《発表者》越田・宗像・広田 12月17日
- *史跡標津遺跡群天然記念物標津湿原整備委員会（標津町）
《委員》千葉 12月17日

(2) 研修

ア 研修・研究会参加

- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（大津市）
森重・松本 5月12日～13日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（富山市）
森重・西田 6月9日～10日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会北海道・東北地区会議・北海道・東北地区コンピュータ等研究委員会研修会（いわき市）
葛西・倉橋 10月13日～14日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（北九州市）
吉田・中村・直江 10月20日～21日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（東京都）
森重・松本 11月14日～15日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修（中国）
中山・鈴木（宏）・影浦 12月6日～13日
- *奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修（奈良県）
平成16年度「陶磁器調査課程（古代）」
佐藤（剛） 2月15日～22日
- 平成16年度「自然科学的年代決定法課程」
笠原 2月28日～3月4日
- 平成17年度「写真基礎課程」
広田 11月24日～12月7日
- 平成17年度「自然科学的年代決定法課程」
酒井 12月13日～21日
- *奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者特別研修（奈良県）
平成16年度「動物考古学課程」
大泰司 3月10日～15日
- 平成17年度「遺跡地図情報課程」
倉橋 11月8日～11日
- *博物館ボランティアのつどい2005（札幌市）
倉橋 9月12日
- *平成17年度アイヌ民俗文化財専門職員等研修会（札幌市）
田口 10月26日～28日
- *保存科学研究集会2005（奈良市）
田口 12月9日

イ 内部研修

*平成17年度現地調査報告会（センター研修室）

11月29日

5 平成17年度刊行予定報告書

第220集『共和町 リヤムナイ 3 遺跡 (1)』

一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第221集『千歳市 オルイカ 2 遺跡 (2)』

一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第222集『森町 森川 3 遺跡』

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第223集『白滝遺跡群Ⅵ』

一般国道450号白滝丸瀬布工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第224集『恵庭市 西島松 5 遺跡 (4)』

柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第225集『千歳市 チプニー 2 遺跡 (3)』

一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第226集『江別市 対雁 2 遺跡 (7)』

石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第227集『共和町 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ 3 遺跡 (2)』

一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第228集『早来町 大町 2 遺跡』

一般国道234号早来バイパス建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

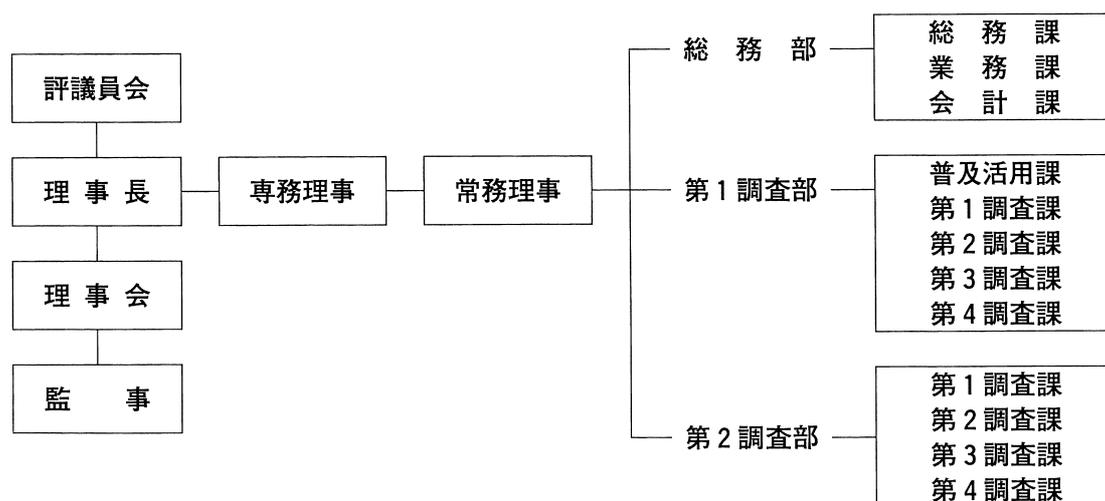
6 組織・機構

役員（平成17年6月1日現在）

理事長	森重楯一
専務理事	宮崎勝
常務理事	佐藤俊和
理事	石林清
理事	海津順吉
理事	菊池俊彦
理事	北川芳男
理事	谷本一之
理事	田端宏
理事	西田豊
監事	佐藤一夫
監事	村山邦彦

評議員（平成17年6月1日現在）

評議員	加藤邦雄
評議員	坂本邦夫
評議員	白崎三千年
評議員	昌子守彦
評議員	鶴丸俊明
評議員	永井秀夫
評議員	福田誠行
評議員	古俣芳晴
評議員	村瀬剛太
評議員	山田健



7 職 員 (平成17年 4 月 1 日現在)

総 務 部

総務部長	○牧野義則	業務課長	菅野 聡
総務課長	松本 繁	主任	礪田千秋
主任	葛西宏昭	主任	小杉 充
主査	中村貴志	主査	小笠原学
主査	金谷英男	主査	中村輝夫
主査	加藤英樹	主査	菊地隆雄
		會計課長	吉田貴和子
		主任	今本宏信

第 1 調 査 部

第1調査部長	○千葉英一
普及活用課長	○田中哲郎
主任	藤本昌子
主任	藤井浩孝
主任	倉橋直孝
第1調査課長	田口尚
主任	花岡正光
主任	立川トマス
第2調査課長	佐藤和雄
主任	村田大昌
主任	土肥研昌
主任	立田理
主任	吉田裕吏洋
第3調査課長	○高橋和樹
主任	越田雅司
主任	鈴木宏行
主任	影浦覚
主任	直江康雄
第4調査課長	三浦正人
主任	皆川洋一
主任	菊池慈人
主任	新家水奈人
主任	愛場和義
主任	阿部明良
主任	広田良成

第 2 調 査 部

第2調査部長	西田茂
第1調査課長	遠藤香澄
主任	鈴木信
主任	笠原興
主任	袖岡淳子
主任	芝田直人
主任	酒井秀治
第2調査課長	佐川俊一
主任	中山昭大
主任	○宗像公司
主任	富永勝也
主任	山中文雄
第3調査課長	熊谷仁志
主任	谷島由貴
主任	末光正卓
主任	坂本尚史
主任	佐藤剛
主任	大泰司統
第4調査課長	○工藤研治
主任	鎌田望一
主任	福井淳一
主任	柳瀬由佳

○：北海道教育庁の派遣職員

調 査 年 報 18

平成17年度

平成18年 2月 7日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685-1
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp/>
E-mail mail@domaibun.or.jp

印 刷 社会福祉法人 北海道リハビリー
〒061-1195 北広島市西の里507番地1
TEL 011-375-2116(代)・FAX 011-375-2115
